天理市埋蔵文化財調査概報

（平成14・15年度・国庫補助事業）

大和古墳群・成願寺遺跡

平等坊・岩室遺跡（第22次）

柳本立花遺跡（第2次）

柳本立花遺跡（第3次）

平等坊松ノ木遺跡

平等坊環濠遺跡

2005

天理市教育委員会

例　言

1．本書は、天理市教育委員会が平成14・15年度に国庫補助事業として実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、天理市教育委員会生涯学習課（平成15年度より文化財課）文化財係が実施し、技術吏員青木勘時、松本洋明がそれぞれの現地調査を担当した。

3．本書収録の調査地および調査期間、調査担当は以下の通りである。

【平成14年度（2002年）の調査】

大和古墳群・成願寺遺跡　　調査地：天理市成願寺町444-1・2　　調査担当：青木勘時
調査期間および調査面積：平成14年5月20日～6月29日　60㎡

平等坊・岩室遺跡(第22次)　　調査地：天理市平等坊町201番地　調査担当：青木勘時
調査期間および調査面積：平成15年2月19日～3月18日　120㎡

柳本立花遺跡(第2次)　　調査地：天理市柳本町2563-2566　　調査担当：青木勘時
調査期間および調査面積：平成15年3月19日～26日　45㎡

【平成15年度（2003年）の調査】

柳本立花遺跡(第3次)　　調査地：天理市柳本町2590-1番地　　調査担当：青木勘時
調査期間および調査面積：平成15年6月26日～7月9日　60㎡

平等坊松ノ木遺跡　　調査地：天理市杉本町181-3番地　　調査担当：松本洋明
調査期間および調査面積：平成15年9月9日～9月12日　8㎡

平等坊櫁遺遺跡　　調査地：天理市平等坊町126番地　　調査担当：青木勘時
調査期間および調査面積：平成16年2月5日～2月20日　50㎡

4．現地調査から遺物整理作業および本書作成に至るまでに下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表する。

江角啓（大阪市立大学大学院）、元木和歌子（天理大学卒業生）、古田陽・福家茜（天理大学学生）、
石井里英（立命館大学学生）、岩本有加（大阪市立大学卒業生）、芳村信芳、中森富美代、藤岡早希

5．現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。

近藤義郎（岡山大学名誉教授）、置田雅昭（天理大学教授）、太田三喜（天理参考館）、
今尾文昭・小池香津江（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、山川均（大和郡山市教育委員会）
樋山茂（京都文化博物館）、高正龍（立命館大学助教授）

6．本概報の執筆はそれぞれ調査担当者および参加者が分担し、目次にその文責を明記した。なお、編集については青木勘時がおこなった。

目　次

平成14・15年度(2002・2003年)国庫補助事業による発掘調査地点位置図……1
【平成14年度(2002年)の調査】
大和古墳群・成願寺遺跡の調査（青木）
Ⅰ．はじめに……2
Ⅱ．調査の概要……3
1．層序と検出遺構……3
2．出土遺物……5
Ⅲ．まとめ……9
平等坊・岩室遺跡(第22次)の調査（青木）
Ⅰ．はじめに……12
Ⅱ．調査の概要……12
1．層序と検出遺構……12
2．出土遺物……15
Ⅲ．まとめ……18
柳本立花遺跡(第2次)の調査（青木）
Ⅰ．はじめに……21
Ⅱ．調査の概要……22
1．層序と検出遺構……22
2．出土遺物……23
Ⅲ．まとめ……24
【平成15年度(2003年)の調査】
柳本立花遺跡(第3次）の調査（青木）
Ⅰ．はじめに……25
Ⅱ．調査の概要……26
1．層序と検出遺構……26
2．出土遺物……27
Ⅲ．まとめ……28
平等坊松ノ木遺跡の調査（松本）
Ⅰ．はじめに……29
Ⅱ．調査の概要……30
Ⅲ．まとめ……30
平等坊環濠遺跡の調査（青木）
Ⅰ．はじめに……31
Ⅱ．調査の概要……31
1．層序と検出遺構……31
2．出土遺物…（石井）……34
Ⅲ．まとめ……42

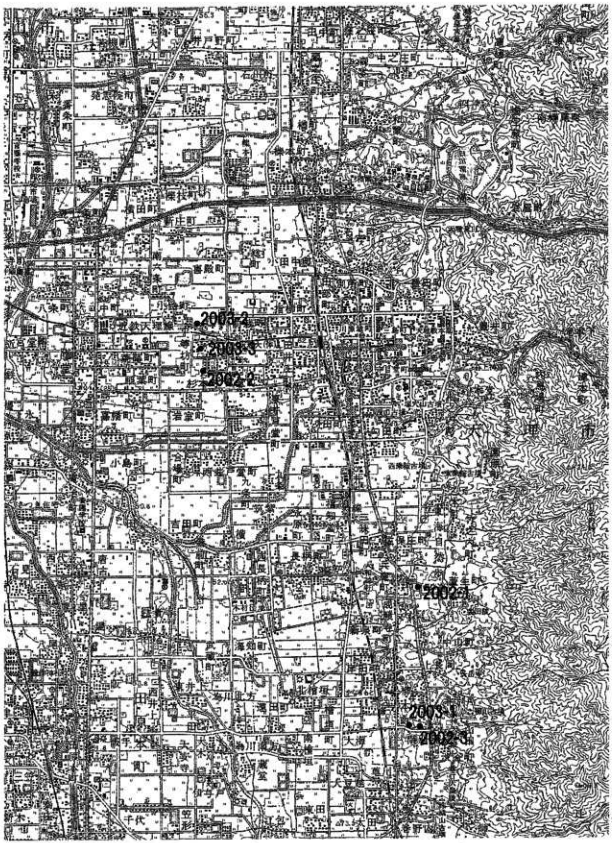


図1　平成14・15年度(2002・2003年)国庫補助事業による発掘調査地点位置図　S=1/50000

2002-1:大和古墳群成願寺遺跡　2002-2:平等坊・岩室遺跡(第22次)　2002-3:柳本立花遺跡(第2次)
2003-1:柳本立花遺跡(第3次)　2003-2:平等坊松ノ木遺跡(第2次)　2003-3:平等坊環濠遺跡

大和古墳群・成願寺遺跡の調査

Ⅰ．はじめに

今回の調査は、個人住宅建設に伴って実施した大和古墳群・成願寺遺跡における小面積の発掘調査である。

調査地の周辺では大和古墳群萱生支群を構成する大小の古墳が点在し、北にノムギ古墳、ヒエ塚古墳、南に栗塚古墳、フサギ塚古墳、東側に近接してマバカ古墳が所在する。また、これら古墳群を内包する丘陵緩斜面上では弥生後期～古墳前期の遺物散布が認められる成願寺遺跡が重複する。成願寺遺跡については、これまでに面的な発掘調査が実施されておらず集落遺跡としての実態は不明瞭である。おそらく大和古墳群造営の前後にわたる基盤集落と考えられるが、現状では数ヶ所の調査地点で遺構・遺物の存在が確認されているに留まっている。

当該調査地のすぐ東側では、奈良県立橿原考古学研究所による天理環状線道路建設に伴う発掘調査が進行しており、大和古墳群萱生支群中のノムギ古墳、ヒエ塚古墳、マバカ古墳等の墳丘裾部近辺の

図2　大和古墳群・成願寺遺跡調査地点位置図　S=1/5000

状況が確認されつつあった。従って、今回調査地点の成果も含めて今後の大和古墳群と古墳周辺との関わりも含めた前期古墳研究に提供される検討材料の蓄積が期待された。

Ⅱ．調査の概要

調査では、調査地の中央に幅３ｍを基調とした南北方向のトレンチ調査区を設定し、人力と重機掘削を併用して実施した。以下、調査成果についての概観を記しておきたい。

１．層序と検出遺構

(1)基本層序

調査区全域ともに現地表下約 50～70 ㎝で遺構検出面となる。検出面では調査区の南側で次第に遺構面が下降し、東から西にかけても同様に傾斜する地形の一部を確認している。

遺構面上部の堆積層順では、上部より客土による整地土層と旧耕作土からなる第Ⅰ層、床土に相当する第Ⅱ層と続き、下位では黄褐色砂礫混じり砂質土の第Ⅲ層・最上部遺物包含層および灰黄褐色砂礫混じり粘質土を基調とする第Ⅳ層・上部遺物包含層の堆積が確認された。それぞれが包含する遺物の内容から第Ⅲ層が弥生後期～中世後期に、第Ⅳ層が弥生後期～奈良・平安期までの時期幅を考えることができる。また、調査区南西～南東隅にかけては弥生後期～古墳前期の遺物を包含する灰黄褐色砂混じり粘質土がわずかに遺存しており第Ⅴ層・下部遺物包含層となる。遺構検出面までの層順として把握した層序は以上である。

次に、遺構検出面以下では、調査区南半のみに弥生中期土器片を微量に含む褐色土ブロック混じり黄灰色砂質土の第Ⅵ層・最下部遺物包含層が部分的に遺存し、以下に基盤層を形成する黄灰色砂礫土の第Ⅶ層を確認している。

(2)検出遺構

検出遺構面は調査区北半では直上までに第Ⅳ層の堆積があり、おおよそ平安期(10 世紀後半～末)の耕作、整地等により削平を受けた状況であった。

土坑 SK01

南西隅の土坑 SK01 は調査区内の最低部で検出された不整形な平面形態の土坑である。検出面の上部周辺には第Ⅴ層・下部遺物包含層の堆積が介在し、埋土中からも弥生中･後期の土器片が多く出土している。埋土は上部より褐灰色粗砂混じり粘質土、黒褐色砂混じり粘質土、灰色砂質土、褐灰色砂質土と続き底面ではにぶい黄色砂礫土の基盤層となる。土器片を主体とする遺物は埋土の中ほどの黒褐～灰色土中に集中して出土しており、その堆積状況からは水流を伴うような状況での埋没が考えられる。ここでは土坑として扱うことになったが、実際は自然流路の岸辺に該当するものかも知れない。

埋没古墳 ST01(古墳周濠 SD01 と墳丘盛土の遺存部分)

調査区の北から約 2/3 の範囲では、ほぼ直角に屈曲する平面形で溝(古墳周濠 SD01)を検出しており、この溝による西側の囲みのなかでは遺構検出時に調査区南半とは異なる土壌が認められた。溝の掘削を進めた結果、埋土の上層では古墳～平安の土器片と埴輪片が、下層に拳～人頭大の礫を上部に介在する粘質土の堆積があり、ここでは弥生後期末～古墳前期の土器･埴輪片が検出された。出土土器類には明らかに混入と考えられる弥生後期後半～庄内式期の土器片のほかに古墳に伴うことが確実な底部

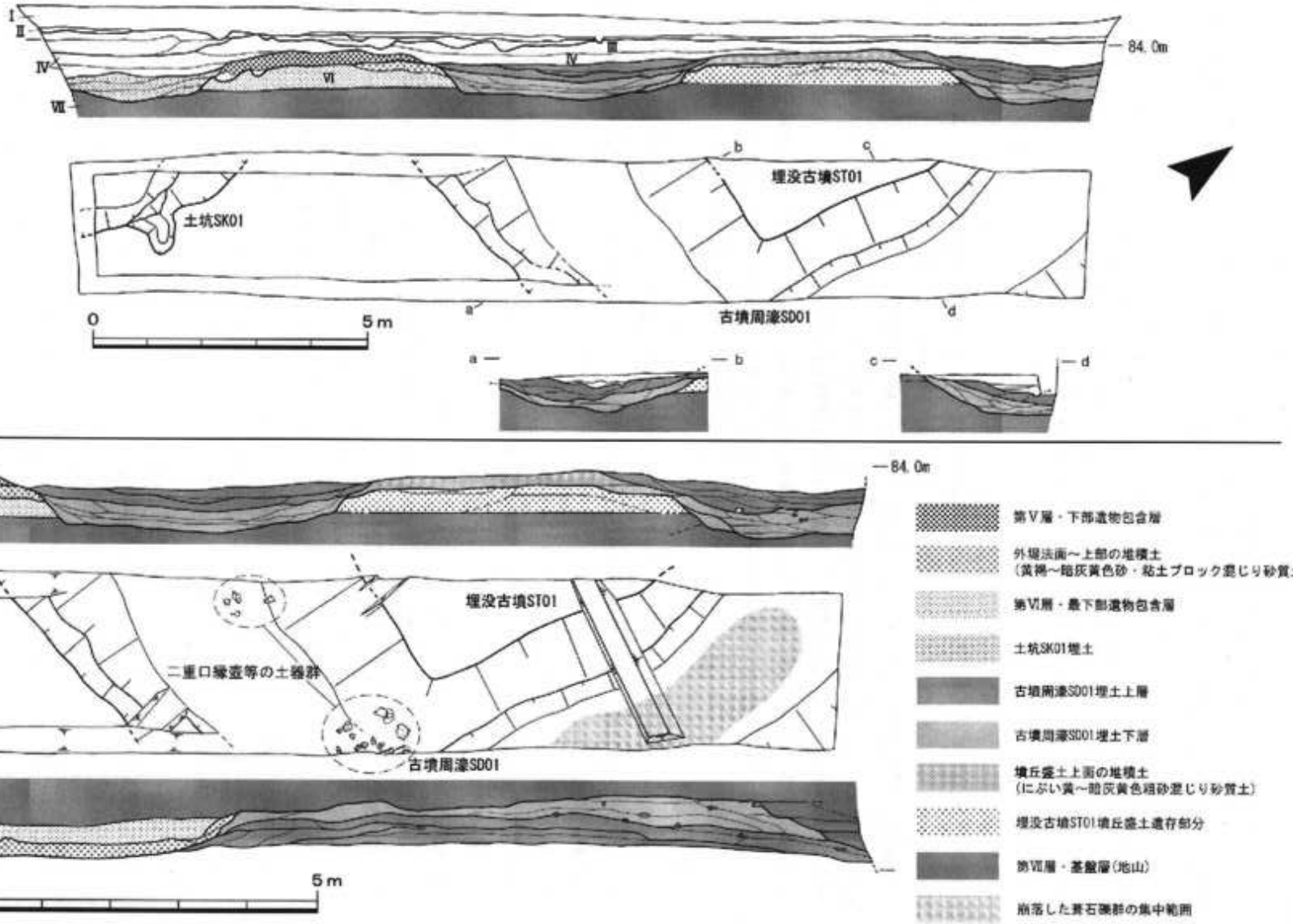


図3　調査区平面・土層図　全体図S=1/100・部分図S=1/80

底部穿孔(焼成前)二重口縁壺の破片が多く出土しており複数個体での存在が想定される。

前記の西側囲みから溝底部にかけての傾斜面では大型の砂礫混じりの堆積土が目立ち、内側で砂質土を基調とする二層の人為的な堆積層を確認したためこれを墳丘盛土、溝埋土中の礫を葺石の崩落と判断することが可能であった。従って、これら調査区北半の遺構については埋没古墳として捉えることができ、溝については墳丘外縁を巡る周濠として判断した。

古墳周濠 SD01 は検出面で幅４m 前後、深さ約 50 ㎝を測り、墳丘部分については東西２m、南北3.5mを検出したに過ぎない。しかしながら、葺石痕跡や埴輪、二重口縁壺の出土とともに方形墳丘一角の平面区画を確認できた意義は大きいと考えたい。

２．出土遺物

第Ⅲ～Ⅴ層の各遺物包含層および古墳周濠 SD01、土坑 SK01 の遺構埋土より土器片を主体とした遺物が出土しており、総数はコンテナにして約８箱分である。各層出土遺物の時期幅については層序の記述の通りであるが、ここでは図示した遺構出土遺物のみに限定して記述しておきたい。また、色調、胎土、焼成の状況や法量等の詳細については観察表にまとめておいた。

古墳周濠 SD01 出土遺物

１は調査区東辺の溝屈曲部角付近の土器群より復元した底部穿孔二重口縁壺である。
やや肩が張る長胴の胴部に外上方に拡張する二重口縁が付く壺であり、底部は焼成以前より底面を作らずに仕上げたものである。外面調整は底部付近の強いナデ調整と部分的な指頭圧痕を施す部分を除き基本的にはハケ調整による。口縁部ではタテハケ調整を基調とし、頸部より下位の胴部全体をタテ、ナナメハケ調整した後に肩部付近のみに連続的なヨコハケが施される。内面では、頸部から口縁部にかけてヨコ、ナナメハケ、頸部直下付近にヘラケズリ以前の板ナデ調整を残すものの、胴部全体にヘラケズリ調整が施されるが総体的に見て器壁は厚手に仕上げられている。また、頸部直下、胴部中位および底部付近の内面には粘土紐接合痕跡が明瞭に残り、意図的に底面を欠く底部の内側端面付近には指頭圧痕が多く巡らされる。色調はにぶい黄橙色で胎土には砂粒を多く含むが、後述の埴輪片とは異なる胎土、焼成状況を呈する。なお、外面には部分的に赤彩の痕跡が残る。

２・３は頸部が内傾する二重口縁壺である。胴部以下は断片的な小片のみで不明な点が多いが後述する底部片から底部穿孔の壺として想定される。両者ともに若干の大きさの違いは見られるものの同種の壺と思われる。どちらも内傾する頸部の外面にはタテハケ後のヨコハケが施され、内面には粘土紐接合痕付近に連続的な指頭圧痕が巡らされている。内面頸部以下は全体にヘラケズリにより器壁を薄く仕上げる。頸部直下から胴部上位までが残る３では、頸部の外面調整と同様にタテハケ後の連続するヨコハケが巡らされ、内面側の全面にケズリ調整を施す手法が窺い知れる。これらの壺は、形態的に見て吉備系の特殊壺に酷似するが、製作手法では布留式土器の特徴が随所に窺え、胎土からも在地産の変容形態と思われる。にぶい赤褐色の色調を呈し、胎土はやや精良なもので製作されている。

４は口縁部外端面に凹線が巡る口縁部片である。器種については広口壺とも考えられるが外面にはタテハケを基調とした調整が見え、内面側にナナメハケ調整後のケズリ調整を残すなどの粗雑な点から器台となることも考えられる。ここでは壺として図示したが透かし孔を残す同様な調整と胎土の小片もあり、それらの存在から器台になることも想定されるため器種の特定には検討の余地を残す。

5～9は焼成前穿孔の底部片である。すべて底部全周の 1/6 以下のみ残る小片よりの実測復元によるため底径等の法量にばらつきがあるが、概ね 10cm 前後の大きさとなるようである。底部外端面の仕上げと色調の違いにより5と6～9の二種類の形態が認められる。5の底部は外面調整に多少の差は認められるものの1の二重口縁壺と同形態であり、外端面の接地面への刻み目と外面に部分的に残る赤彩が特徴的である。6～9の底部小片では、共通する手法として底部外端面を内側に折り曲げた後に器壁の内外に連続的な指頭圧を施すことにより穿孔底面周囲の仕上げをおこなう方法が看取される。外面調整はナデ、内面には板ナデを施し、先述の端面の折り曲げに伴う粘土紐接合痕跡を残す点でも共通しており、複数の同種の壺底部として考えられる。7のみに外面にヘラ状工具による線刻が施されることが特徴となる。これらの壺底部は色調的には2・3の壺と類似しておりその底部形態と考えられるものである。

10～12は埴輪片である。10は外面に一次調整のヨコハケ、ナデ、内面にナナメハケが残る円筒埴輪である。断面矩形の突出した突帯が付され、三角形透かし孔の一辺が見られる。11の円筒埴輪片にも同様な突帯が付されるが、円筒側の剥離面には方形刺突痕跡と突帯貼付前の一次調整のタテハケが残る。12は板状の埴輪小片である。側端面にヘラ状工具による刻み目が見られ、形態的に鰭付円筒埴輪の鰭部であると考えられる。これらの埴輪片には、すべての形態、調整においてほぼ古墳前期前半期の特徴を認めることができる。

13～61の土器片のほとんどは当該古墳には伴わない周濠埋土中の混入遺物である。

13～22は甕である。叩き成形による弥生後期型甕あるいはその後の外面ハケ調整が残り内面板ナデ調整のものが多数を占める。20の甕には外面水平、左上がりの叩きと内面ケズリ調整が見られ、庄内大和型甕の特徴が窺える。また、21の有段口縁甕は色調、胎土ともに在地産の土器とは異なる山陰系土器であり伯耆、因幡あるいは兵庫山間部からの搬入品と思われる。22は布留型甕の小片である。内湾口縁と口縁端部の内面肥厚から典型的な布留式の甕と言える。

23・24は台付鉢の脚部片である。どちらもやや大型の鉢に付されるものと考えられる。

25～41は高杯である。25は弥生後期型高杯の杯部片、26は布留式の高杯杯部片であり精良な胎土と内外面の細かいミガキ調整が特徴となる。27～41は脚柱部片である。中空と中実のものがあり、形態的には長脚と短脚の両者が見られる。どれも基本的には外面タテヘラナデ、ハケ、ミガキのいずれかの調整が施されている。外面に多条の沈線が巡らされた36の脚柱部片は東海地方の山中式土器の影響が認められるが、胎土からは在地産として判断される。39～41の低脚高杯では、脚柱と脚裾部の間に明瞭な稜が認められず厚手のつくりで調整も粗雑なもののみが見られた。

42～61は底部片である。いずれも壺、鉢、甕の底部となる。大小の様々な形態と調整が見られる。59～61のみ底部の小孔穿孔により有孔鉢として器種の比定が可能である。

以上の古墳周濠 SD01 出土土器のうち古墳に伴うものとして限定可能なものは1～9の底部穿孔二重口縁壺と10～12の埴輪片であるが、他の埋土出土土器片にも幾つかの同時期あるいは近接した時期の土器片が認められる。22の布留型甕と26の高杯杯部、37・38の高杯脚柱部がそうであり、いずれも布留式古相後半期の範疇に帰属が求められるものである。

周濠埋土への混入遺物では弥生後期後半～古墳前期初頭の土器片が主体となるが、概ね弥生後期後

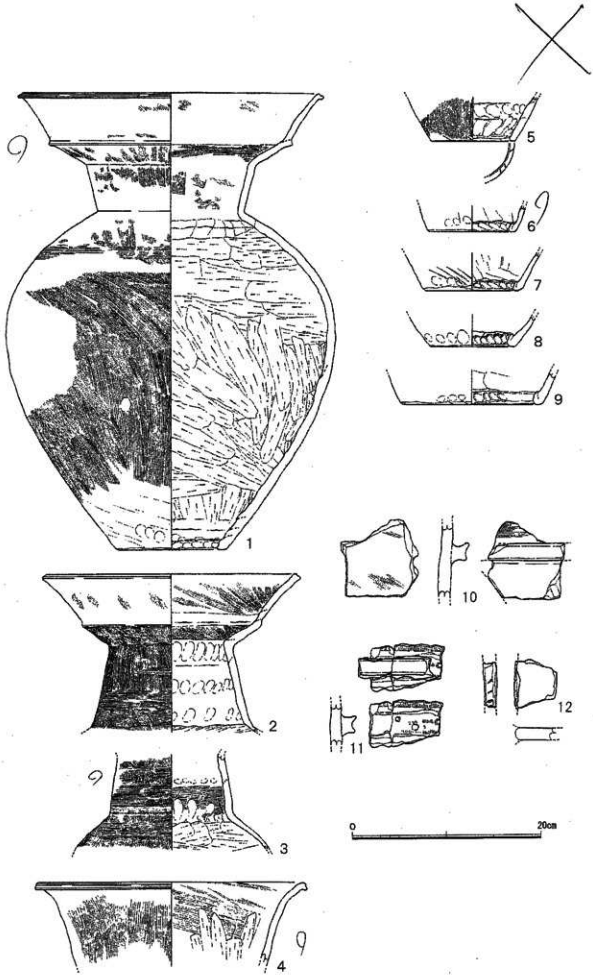


図4 出土遺物実測図1 S=1/4

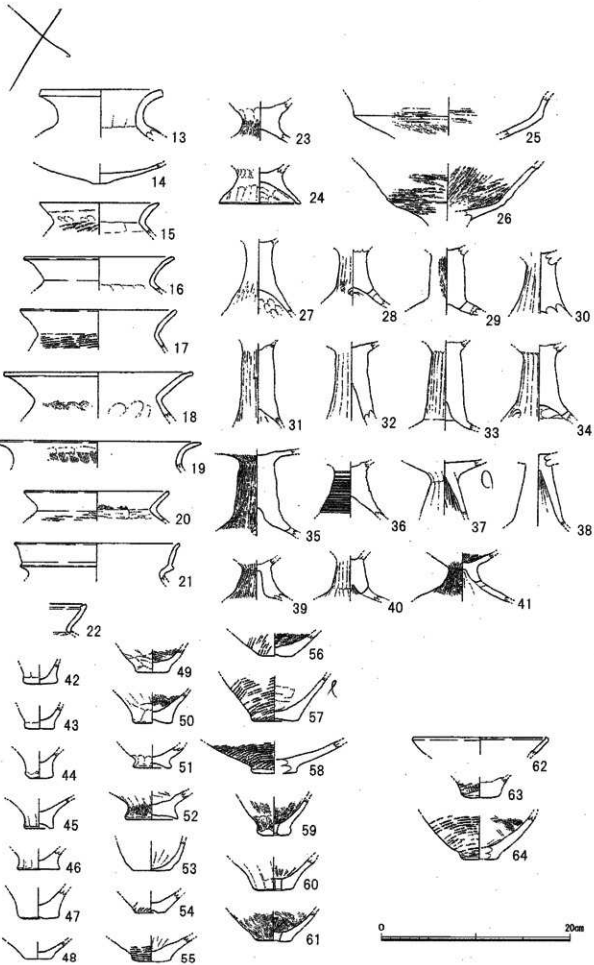


図5 出土遺物実測図2 S=1/4

半・末～庄内式期前半と庄内式期末～布留式期初頭の二時期のまとまりが認められる。

土坑 SK01 出土遺物

62～64 はいずれも埋土上部より出土した小片である。62 は甕の口縁部片、63・64 は叩き成形痕の残る底部片である。これらの土器片は、甕では口縁端をつまみ上げる形態的特徴のみが知られ、平底の底部形態とともに概ね弥生後期後半～末あるいは古墳前期初頭までの時期幅での帰属が考えられるものである。なお、図示した土器片のほかに弥生中期後半の土器細片も出土している。

Ⅲ．まとめ

今回の調査では、新規に発見された埋没古墳とその築造より以前に遡る時期の集落内遺構を確認している。さらに、遺物包含層出土遺物から成願寺遺跡の集落の初現が弥生中期前半頃となることも追認することができた。以下、調査成果について再度まとめておくことにする。

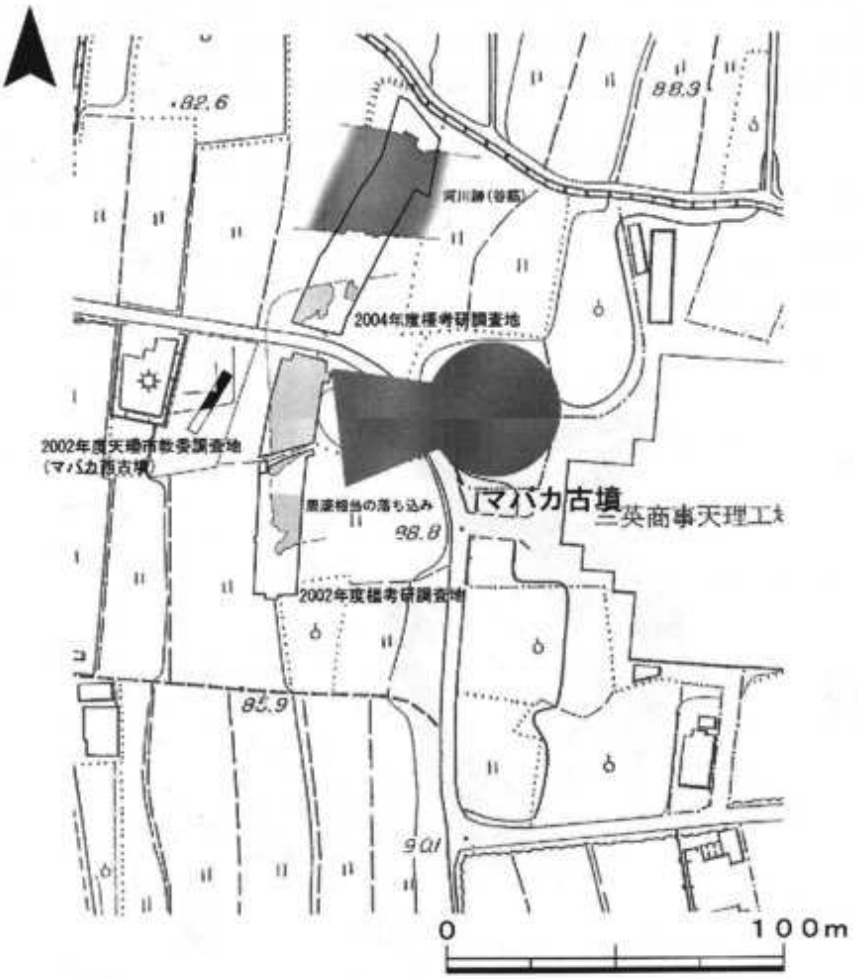


図6 マバカ古墳と周辺の調査地 S=1/2000

埋没古墳 ST01

壺と埴輪の同時併存が認められ、二種類の形態の底部穿孔二重口縁壺を墳丘上に複数配置し、加えて鰭付円筒埴輪と普通円筒埴輪を巡らした墳丘の状況が想定される古墳である。

墳形、墳丘規模については一部分のみの確認に過ぎず不明瞭な点は否めない。しかしながら、直線的かつ直角に屈曲する部分の見える周濠の平面形状より前方後方墳形の墳形を考えておきたい。その場合、近接するマバカ古墳をはじめとする近隣の多くの前期古墳と同様、東西主軸をとり前方部を西側に向けた古墳とも想定されよう。地形的にも現状地割に西方向へ台形状に隆起、拡張する微地形が見られる点から墳形想定の根拠としたい。次に、墳丘規模では調査地より西方 70m弱で前述の斜面傾斜地形の変換点があることから、それまでの間に墳丘端の存在を考えても墳長は 50m前後におさまるものと考えたい。

なお、調査成果からは葺石の崩落とともに墳丘上の祭祀土器である二重口縁壺が複数多量に周濠内に見られ、東西主軸の周辺古墳がすべて斜面上方の東側に後円部、後方部を配置することなどから調査により検出した部分は前方後方墳の後方部に相当するものと考えたい。その築造時期については、溝 SD01 出土の底部穿孔二重口縁壺と埴輪片の編年観により古墳前期前半の範疇で捉えられよう。最後に古墳の名称についてはマバカ古墳西側に所在することより「マバカ西古墳」と命名しておきたい。

最後に、こうした埋没古墳確認例と周辺における古墳の変遷や築造立地の推移、埴輪や儀器化した壺の保有形態の想定をもとに従来の墳形、墳丘規模等の検討による区分に加えて古墳相互の位置関係による階層区分の検討材料となることも提言できよう。近年、大和東南部地域においても柳本古墳群や纒向古墳群近辺に埋没した前期古墳の存在が幾つか確認されており、次第にその展開と推移が明らかにされることが期待されよう。

写真1　マバカ西古墳周濠SD01出土の底部穿孔二重口縁壺

大和古墳群・成願寺遺跡出土遺物観察表

番号	器種	色調		焼成	法量		残存率	出土地点	備考
					口径・底径	器高(残存高)	(口縁)		
1	二重口縁壺	10YR7/4にぶい黄橙	密	良好	32.2・11.2	48.8		古墳周溝SD-01下層土器群	焼成前底部穿孔 外面赤彩
2	二重口縁壺	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	26.4	16.5	1/6	古墳周溝SD-01	
3	壺	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	—	10.1	—	古墳周溝SD-01	
4	壺あるいは器台	10YR7/4にぶい黄橙	密	やや良好	28.0	8.5	1/5	古墳周溝SD-01下層	
5	壺底部	10YR7/4にぶい黄橙	密	良好	8.8	4.7	—	古墳周溝SD-01	焼成前底部穿孔 外面赤彩
6	壺底部	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	8.8	2.7	—	古墳周溝SD-01	焼成前底部穿孔
7	壺底部	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	9.8	4.0	—	古墳周溝SD-01	焼成前底部穿孔
8	壺底部	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	8.8	3.5	—	古墳周溝SD-01	焼成前底部穿孔
9	壺底部	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	14.8	3.6	—	古墳周溝SD-01	焼成前底部穿孔
10	埴輪片	10YR8/4浅黄橙	密	良好	—	7.8	—	古墳周溝SD-01	
11	埴輪片	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	—	4.5	—	古墳周溝SD-01下層	
12	埴輪片	10YR8/3浅黄橙	密	良好	—	5.0	—	古墳周溝SD-01	鰭付埴輪の鰭部
13	壺	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	12.6	5.1	1/3	古墳周溝SD-01下層	
14	壺	7.5YR6/6橙	粗	軟	1.4	2.1	—	古墳周溝SD-01下層	
15	弥生後期型甕	10YR6/4にぶい黄橙	やや密	やや軟	12.6	3.3	1/5	古墳周溝SD-01下層	
16	弥生後期型甕	10YR7/4にぶい黄橙	密	良好	15.4	3.4	1/4	古墳周溝SD-01下層	
17	弥生後期型甕	10YR5/2灰黄褐	やや密	やや不良	16.6	4.0	1/4	古墳周溝SD-01	
18	弥生後期型甕	7.5YR7/4にぶい橙	密	やや軟	19.8	4.7	1/4	古墳周溝SD-01下層	
19	弥生後期型甕	2.5Y6/2灰黄	密	良好	21.0	2.7	1/5	古墳周溝SD-01下層	
20	庄内型甕	10YR6/2灰黄褐	密	良好	15.2	3.0	1/6	古墳周溝SD-01	
21	有段口縁甕	7.5YR7/4にぶい橙(外) 5YR6/6橙(内)	やや粗	良好	17.4	3.9	1/10	古墳周溝SD-01	山陰系
22	布留型甕	10YR7/4にぶい黄橙	密	良好	—	3.0	—	古墳周溝SD-01下層	
23	脚台部	5YR6/6橙	やや粗	軟	—	4.1	—	古墳周溝SD-01下層	
24	脚台部	7.5YR6/6橙	やや粗	やや良好	8.8	3.7	—	古墳周溝SD-01下層	
25	弥生後期型高杯	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	—	4.0	—	古墳周溝SD-01下層	
26	布留型高杯	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	—	8.0	—	古墳周溝SD-01下層	
27	高杯	7.5YR7/4にぶい橙	密	やや良好	—	7.7	—	古墳周溝SD-01下層	
28	高杯	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	—	5.8	—	古墳周溝SD-01下層(礫より下)	
29	高杯	10YR7/1灰白	密	良好	—	7.3	—	古墳周溝SD-01	
30	高杯	10YR6/4にぶい黄橙	やや密	やや軟	—	6.4	—	古墳周溝SD-01下層(礫より下)	
31	高杯	7.5YR6/6橙	やや粗	やや良好	—	8.2	—	古墳周溝SD-01下層	
32	高杯	5YR7/4にぶい橙	密	良好	—	8.2	—	古墳周溝SD-01	
33	高杯	5YR6/4にぶい橙	密	良好	—	9.1	—	古墳周溝SD-01下層	
34	高杯	5YR6/6橙	密	やや軟	—	8.0	—	古墳周溝SD-01下層	
35	高杯	7.5YR7/4にぶい橙	やや密	やや軟	—	9.0	—	古墳周溝SD-01下層	
36	高杯	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	—	5.7	—	古墳周溝SD-01	東海系
37	高杯	7.5YR7/6橙	密	やや良好	—	8.5	—	古墳周溝SD-01	
38	高杯	2.5YR5/6明赤褐(外) 7.5YR6/6橙(内)	精密	軟	—	7.4	—	古墳周溝SD-01層	
39	低脚高杯	7.5YR6/6橙	やや粗	やや軟	—	4.0	—	古墳周溝SD-01下層	
40	低脚高杯	5YR6/6橙	精密	やや軟	—	4.7	—	古墳周溝SD-01下層	
41	低脚高杯	5YR6/6橙	精密	軟	—	5.0	—	古墳周溝SD-01	
42	底部	10YR4/1褐灰	密	良好	3.1	2.3	—	古墳周溝SD-01	
43	底部	10YR7/3にぶい黄橙	やや密	良好	2.6	2.5	底部完存	古墳周溝SD-01	
44	底部	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	2.3	2.7	底部完存	古墳周溝SD-01下層	
45	底部	7.5YR7/4にぶい橙	やや密	やや良好	2.9	3.0	底部完存	古墳周溝SD-01	
46	底部	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	4.3	2.1	底部完存	古墳周溝SD-01下層	
47	底部	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	4.1	3.2	底部完存	古墳周溝SD-01下層	
48	底部	2.5YR6/8橙	やや粗	軟	2.8	1.9	—	古墳周溝SD-01下層	
49	底部	7.5YR6/6橙	やや密	やや軟	3.4	2.4	—	古墳周溝SD-01下層(礫より下)	
50	底部	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	4.0	3.1	—	古墳周溝SD-01下層(礫より下)	
51	底部	10YR8/4浅黄橙	密	良好	3.8	2.4	底部完存	古墳周溝SD-01上層	
52	底部	10YR6/4にぶい黄橙	やや密	良好	5.2	2.5	—	古墳周溝SD-01下層	
53	底部	10YR7/4にぶい黄橙	やや密	やや軟	3.9	3.0	—	第IV層(下部遺物包含層)	
54	底部	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	3.2	2.3	底部完存	古墳周溝SD-01下層	
55	底部	5YR6/6橙(外) 7.5YR7/3にぶい橙(内)	やや粗	良好	4.0	2.9	—	古墳周溝SD-01	
56	底部	10YR6/3にぶい黄橙	粗	やや良好	3.8	2.4	—	古墳周溝SD-01下層	
57	底部	10YR7/2にぶい黄橙	密	良好	4.8	4.5	底部完存	古墳周溝SD-01下層	
58	底部	10YR5/4にぶい黄褐	やや密	良好	4.6	3.4	—	第IV層(下部遺物包含層)	
59	有孔鉢	5YR6/6橙(外) 2.5YR6/6橙(内)	密	やや軟	3.8	4.0	1/6	古墳周溝SD-01下層	
60	有孔鉢	7.5YR6/6橙	やや密	やや軟	4.4	3.4	—	古墳周溝SD-01下層	
61	有孔鉢	5YR6/6橙(外) 5YR6/8橙(内)	密	やや軟	3.7	3.2	—	古墳周溝SD-01下層	
62	弥生後期型甕	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	14.4	1.8	1/5	土坑SK-01	
63	底部	10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	やや軟	4.2	2.2	—	土坑SK-01	
64	底部	10YR6/3にぶい黄橙(外) 10YR6/2灰黄褐(内)	やや粗	良好	3.8	4.8	—	土坑SK-01	

平等坊・岩室遺跡（第22次）の調査

Ⅰ．はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市の中央に所在する弥生拠点集落である。地理的には奈良盆地東部に位置し、盆地東部山麓の谷筋から派生して市域を西向きに流れる布留川により形成された扇状地下方の沖積平野上に立地している。遺跡の範囲は東西約400m、南北約600mと推定され、これまでに遺跡北半部を中心に実施された20次を越える調査の成果より、弥生前期に環濠集落が確立し中・後期にかけての連続的な集落域の拡大とその後の環濠集落の終焉から古墳時代集落への移行に至るまでの集落の変遷が確認されている。

今回の調査は、前年度実施の第21次調査地（天理市教委2002）の東側隣接地において実施した範囲確認調査であり、前回の調査と同様に弥生後期後半～末に平等坊・岩室弥生集落の北東部に出現した方形区画の様相把握を目的として実施したものである。調査は南北に長い調査地に幅2mを基調とするトレンチ（Ⅱ区：北調査区）を設定し、南端部より北に10mの間にのみ幅6mに拡張（Ⅰ区：南調査区）して第21次調査で確認された方形区画大溝の延長と方形区画北東角の位置確認に努めた。

Ⅱ．調査の概要

1．層序と検出遺構

当調査地における基本層序は第21次調査地とほぼ同様な状況を呈していた。

現地表面下約1m付近までの層序は上位より第Ⅰ層（耕作土）、第Ⅱ層（床土）、第Ⅲ層および第Ⅳ層（中世後期以降の遺物包含層）と続き、その直下では第Ⅴ層（地山）をベースとして弥生前期～後期までの大溝を主体とする重複した遺構群を検出している。

次に、検出遺構ではⅠ区（南調査区）で弥生前期の自然河道NR02、弥生中期大溝SD04およびSD05、方形区画大溝SD01の重複とさらにその上面からの古代～中世の落ち込みSX01による遺構の混在が認められた。Ⅱ区（北調査区）では複雑な遺構間の重複は見られず南半に弥生中期大溝SD02とこれに付随する溝、土坑の一群が、また北半では東西小溝SD03と自然河道NR01の存在を確認している。

以下、各遺構についての概略を記しておく。

溝状落ち込みSX01

Ⅰ区（南調査区）の中央で検出した幅約3m、深さ0.4m前後の東西方向の溝状落ち込みである。埋土からは瓦器、土師質小皿等の中世土器類を主体とした遺物の出土が見られ、奈良・平安期の土器類も混在して出土する。平面形からは東西方向の条里地割に沿う溝であり、調査区東西両側の土層断面観察により同一方向への溝の再掘削による重複関係が認められる。

方形区画大溝SD01

Ⅰ区の大半を占めるように平面的な拡がりを確認している。東側を前述の溝状落ち込みSX01により大きく掘削、破壊されるが、西側では南北両端に層厚約0.4～0.5mほどの埋土の遺存が見られた。遺存状況の良くないと思われた東半部では、上面検出時に平坦面を上向きにして直線的に配置したよ

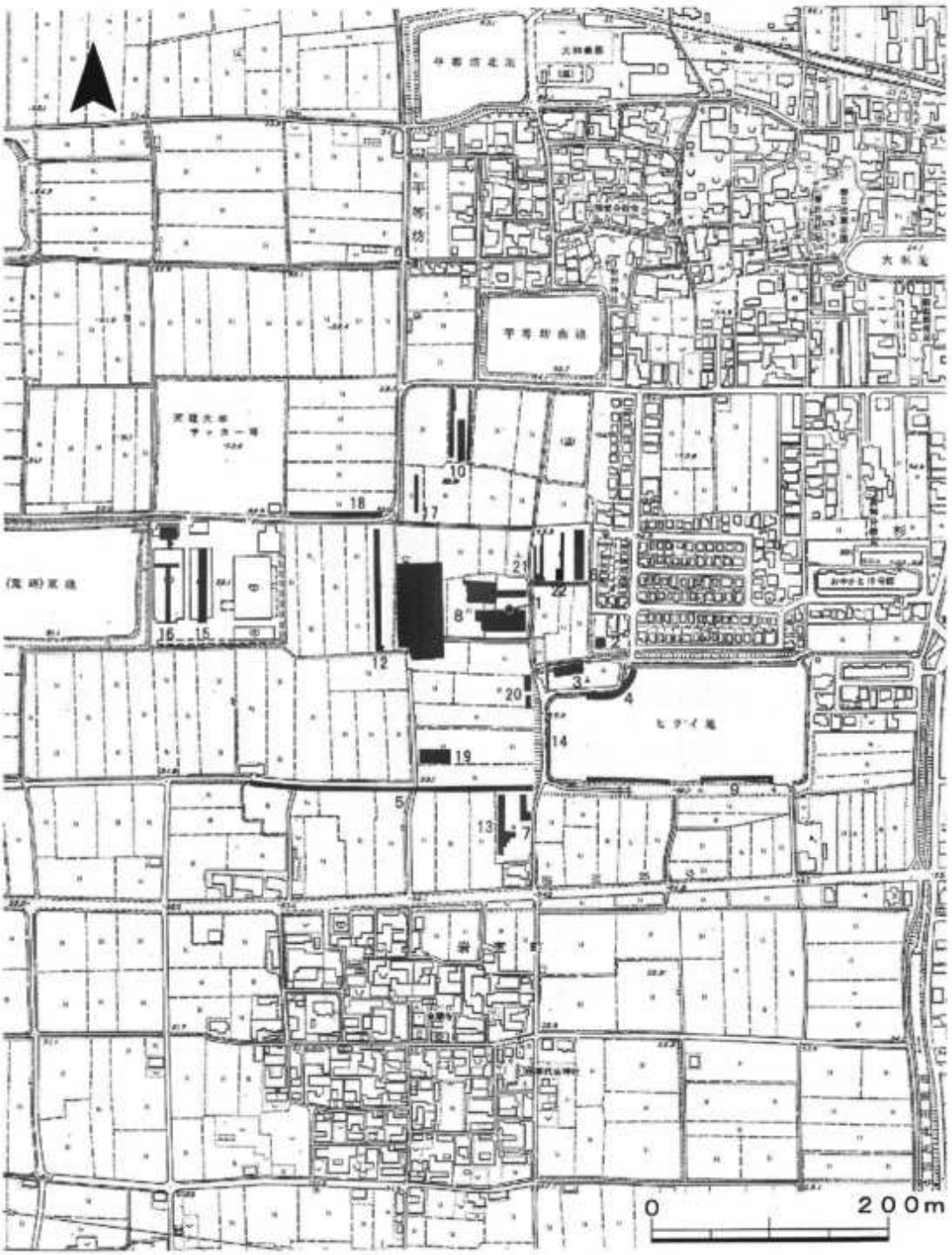


図7　今回の調査地と既往の調査地点位置図（数字は調査次数を示す）　S=1/5000

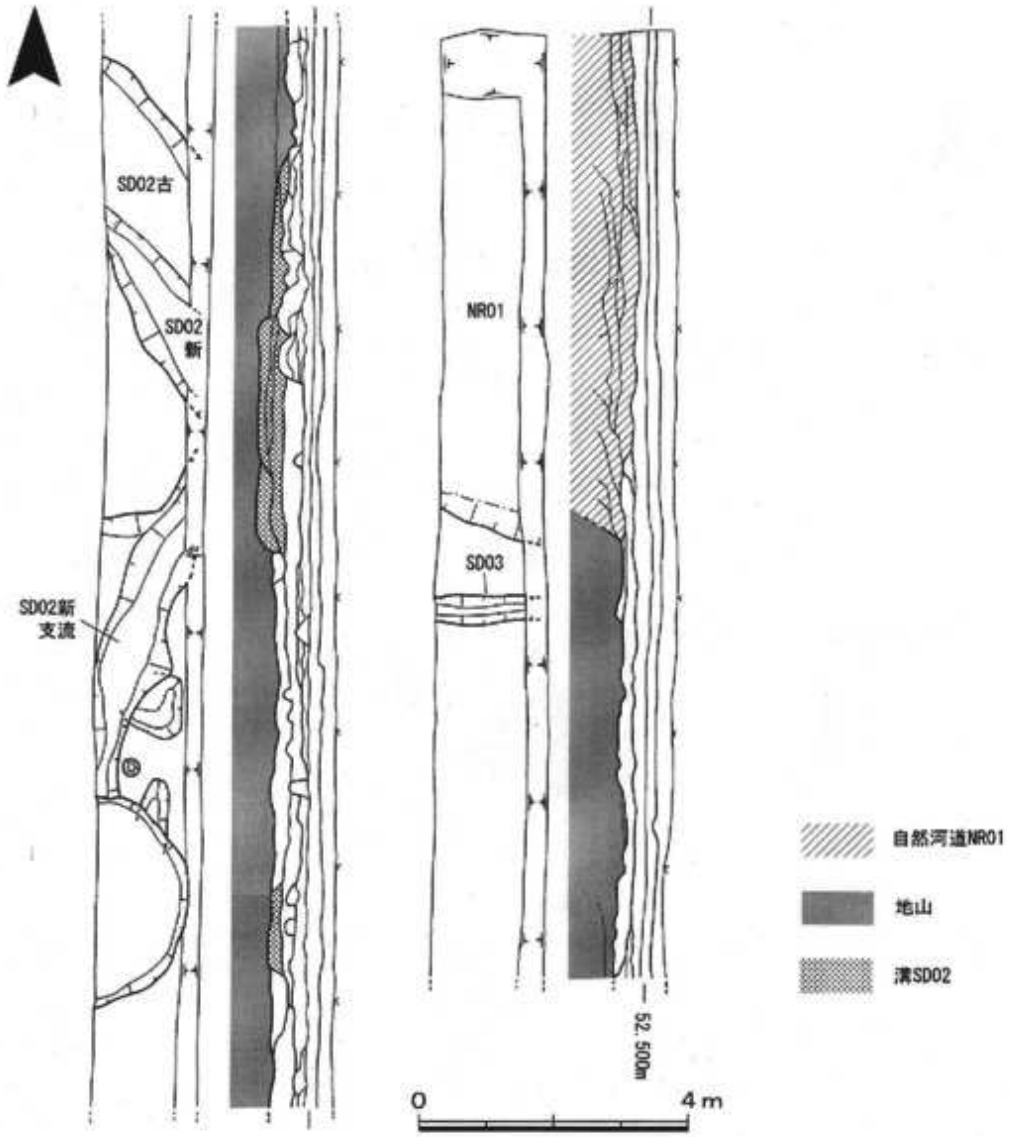


図8 北調査区(Ⅱ区)平面・土層図 S=1/100

うな石のならびが見られ、浅い底面に意図的に置かれたものとも考えられた。その場合、これまでの方形区画大溝の西側とは様相が異なり、平面的にも北側にやや拡張して幅広で浅い部分を残すことから区画内部への出入り口としての機能も予測される施設となるかもしれない。遺物はこれまでと同様に弥生後期後葉～末の土器類が出土しており、方形区画の最初の廃絶時期とも一致する。

溝 SD02

Ⅱ区（北調査区）中央から南半にかけて検出した一連の溝と土坑を付随する遺構群を構成する。北端の北西～南東方向の溝では再掘削による新古の溝の重複が認められ、新相の溝の段階にはこの溝に直交する北東～南西方向の溝（SD02 新支流）と連結した円形土坑が連なりを見せている。SD02 新支流と円形土坑の周囲では浅く窪んだ平坦面が周囲に拡がっており、円形土坑を水汲み場として利用し

た様子が窺える。埋土上部の溝埋没にかかる時期については出土した土器片より概ね弥生中期前半頃と考えられる。

東西小溝 SD03

Ⅱ区（北調査区）北で検出した東西方向の小溝である。埋土より古墳中・後期の土器片、埴輪片が出土している。後述の自然河道 NR01 との連結が位置関係により想定される小溝である。幅 0.4m、深さ約 0.2m前後を測る。

大溝 SD04

Ⅰ区（南調査区）西側南半に位置する大溝である。南西隅に最深部を検出しており、本来的には溝の主要部分よりもその北、東縁辺のテラス状部分を確認したかたちとなる。弥生中期中葉～後半の土器片、木器の未製品等が出土している。

大溝 SD05

Ⅰ区（南調査区）の中央を北西～南東に緩く斜行する大溝である。検出面で幅３m弱、深さ約 0.5mを測り、逆台形の断面形状を示す。埋土からの遺物出土は少なく、弥生中期後半までの埋没時期が考えられる。

自然河道 NR01

Ⅱ区（北調査区）の北端で検出した。調査では検出面より約 0.6mまでの掘り下げをおこなったのみであり完掘には至っていない。粗砂と砂質土層を基調とする上部埋土からは弥生中・後期～奈良・平安期までの土器、平瓦等の遺物が出土している。

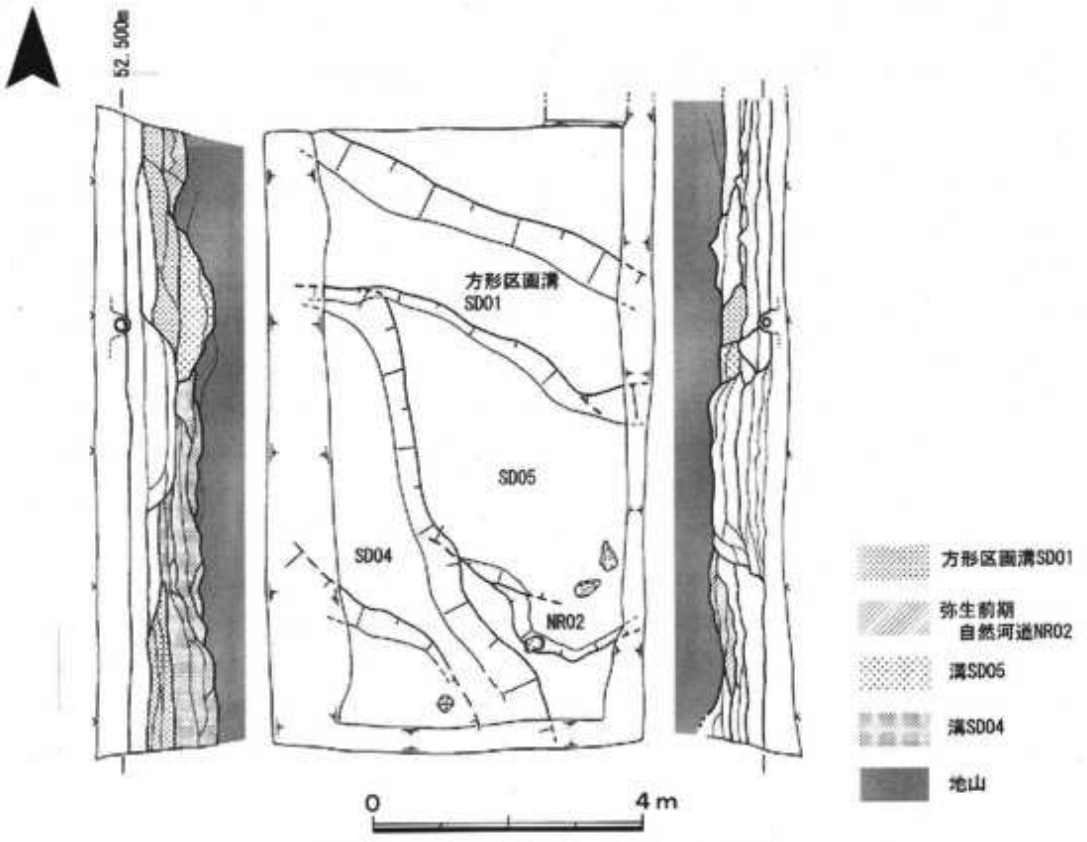


図9 南調査区(Ⅰ区)平面･土層図　S=1/100

自然河道 NR02

I区（南調査区）の北西隅および南東の一角にのみ遺存した砂層堆積である。平面的な分布については上面の弥生中期以降の大溝群によって大部分を欠くため不明瞭である。弥生前期新相の土器片が出土している。

2．出土遺物

調査区全域の第Ⅲ層・第Ⅳ層等上位の遺物包含層や各遺構より弥生前期～古墳後期、奈良・平安期～中世の土器片が出土している。総数はコンテナにして約 14 箱である。以下、主要な遺構の出土遺物についてのみ図示し、詳細については観察表にまとめておいた。

1～9 は溝状落ち込み SX01 出土の古代～中世の土器である。須恵器、土師器、黒色土器、瓦器等があり溝の時期幅を示すものと思われる。

10～12 は方形区画大溝 SD01 出土の弥生後期土器である。完形品を含む大溝廃絶期に投棄された土器の一部であろう。

13～18 は溝 SD02 埋没時期を示す土器片である。

19・20 の土師器と埴輪は溝 SD03 より出土した小片である。

21～26 は溝 SD04 出土の弥生中期中葉～後葉の土器類であり、これらに伴う 27 の木器未製品の廃棄も見られた。材質は不明だが広葉樹の使用が窺える。

28～30 の弥生中期土器は詳細な時期の判断材料に乏しいが溝 SD05 の時期の一端を示す。

31～37 は時期幅の広い土器、埴輪、瓦等の混交出土が見られた自然河道 NR01 出土資料であり、河道の存続時期を示す。

38 は出土遺物で最も時期の遡る弥生前期土器である。自然河道 NR02 より出土している。

Ⅲ．まとめ

今回の調査では、平成 13 年度に実施した西側隣接地における第 21 次調査の際に確認した弥生環濠集落の北東縁辺での状況について、なお一層明らかにすることができた。また、今回調査地の東側隣接地では、以前の第 6 次調査の成果も合わせて考えた場合には集落最縁辺での環濠と周縁低地部との関わりを検討するに足りる弥生中期の遺構群の在り方が窺え、居住域と非居住域（あるいは生産領域、生活困難な自然地形等）の境界における実相を予想することができよう。加えて前史としての弥生前期河道の範囲と中期溝群との重複が指摘され、さらに弥生後期以降出現する方形区画を囲郭する区画大溝の掘削においても集落外縁の水まわりを取り込む意図のもとに立地の選択がおこなわれたことが想起されよう。その位置取りの要因の一つとして元来の人為的掘削による改変地形の踏襲利用がなされた点にも着目したいところである。

当該調査地点の周辺では、現状の水田、畑地等の経営が引き続きおこなわれることが予想される地域であるため、今後に緊急発掘、確認調査ともにその機会が少ないと思われる。今回の調査地とその東西での既往の調査成果を併せたうえで、今後の検討材料として遺構間の連続性等についての図を作成しておいた。細部の説明については別稿にまとめることにし、とりあえず現状理解に供するものとして提示しておく。そうした意味で、今次調査の実施により、第 21 次調査の成果を追認する目的は

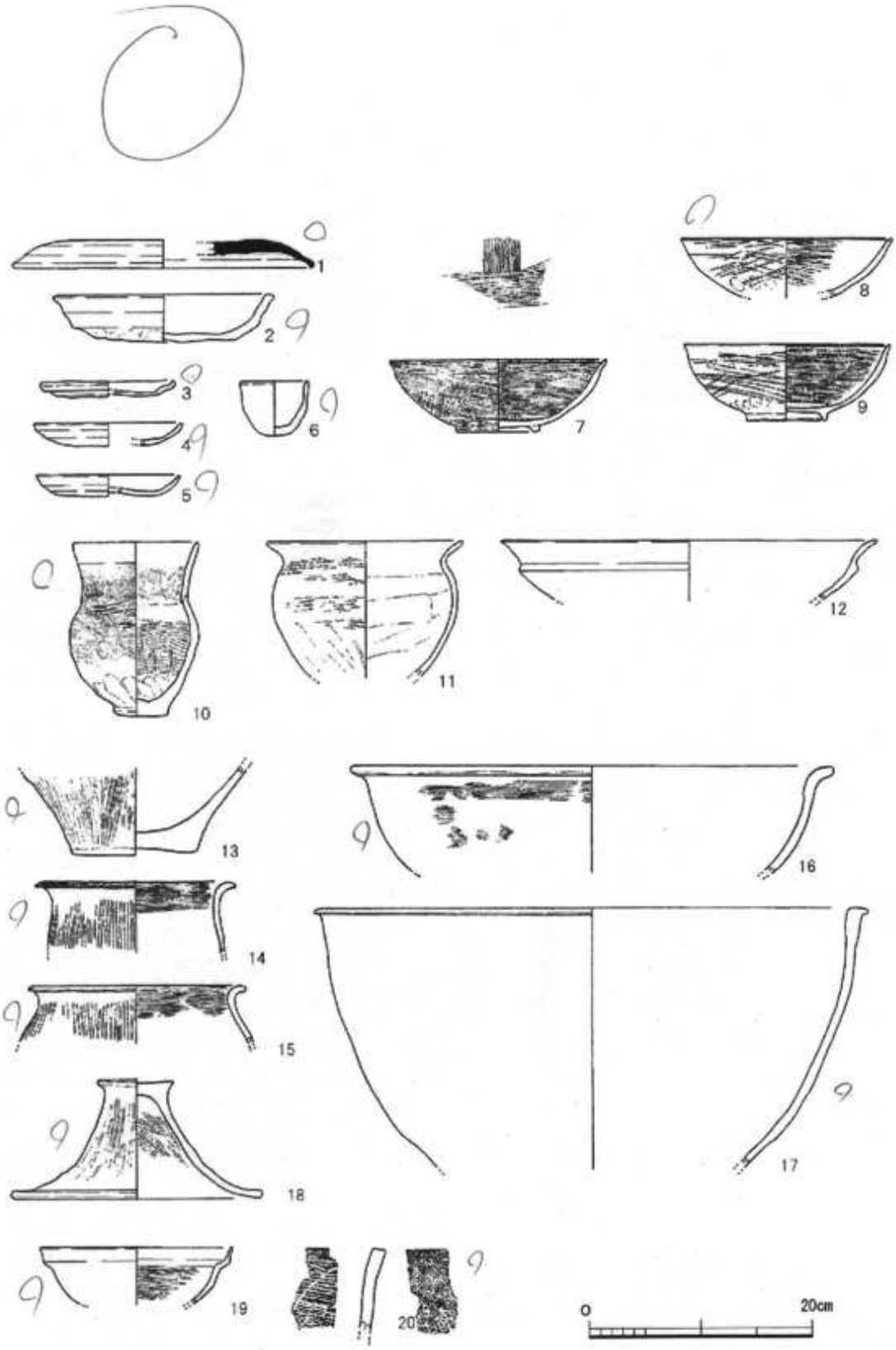


図10 出土遺物実測図1 S=1/4

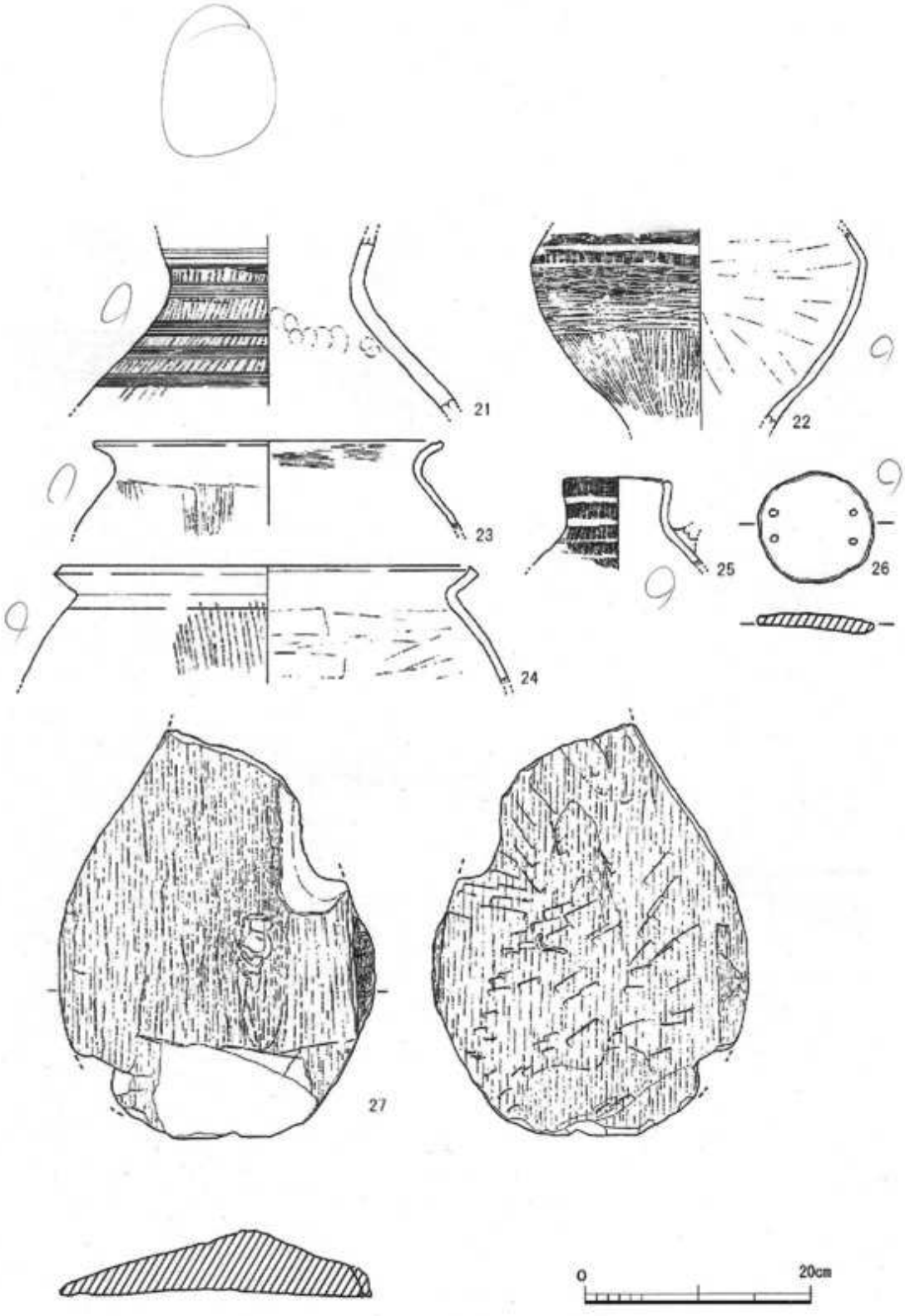


図11 出土遺物実測図2 S=1/4

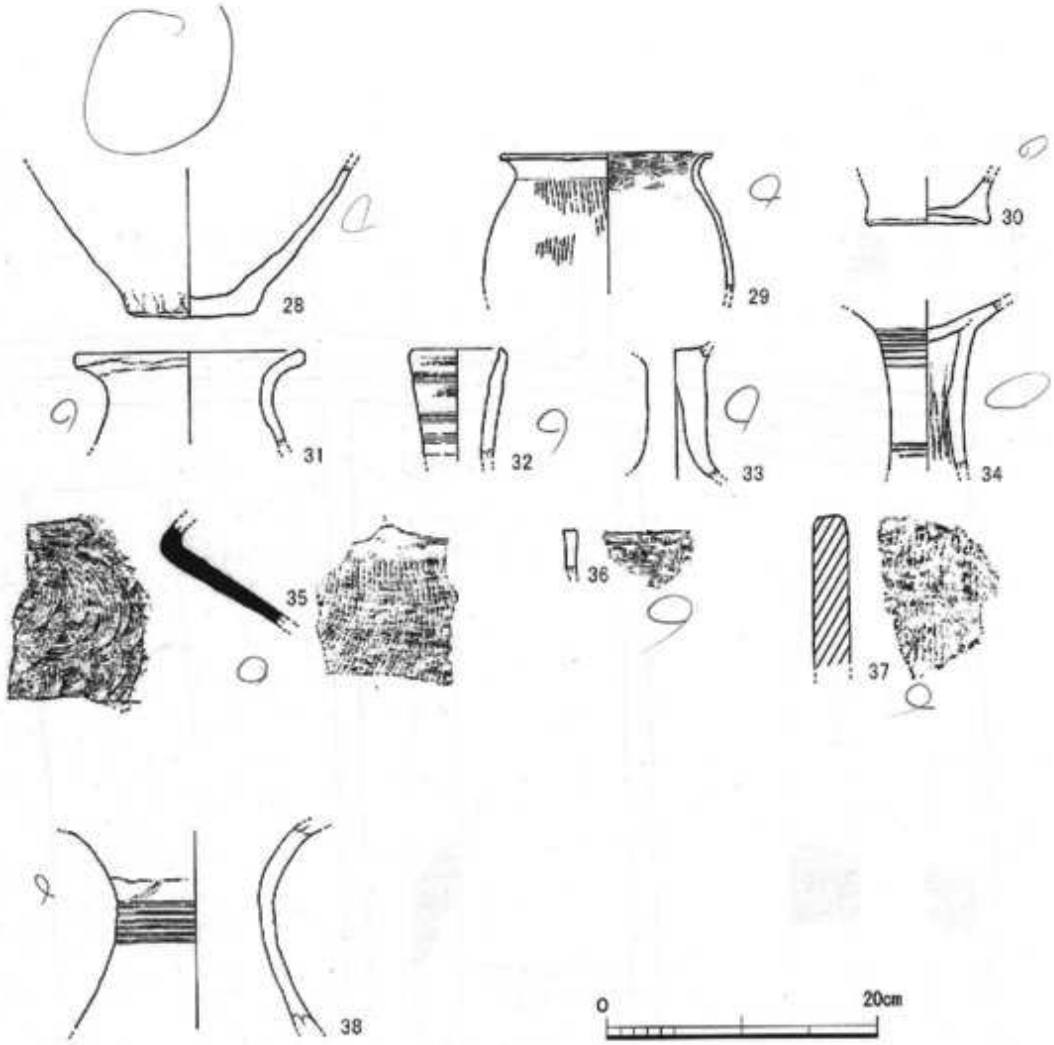


図12 出土遺物実測図3 S=1/4

充分に果たせたと考えたい。

参考文献

天理市教委 2002 『天理市埋蔵文化財調査概報（平成 13 年度・国庫補助事業）平等坊・岩室遺跡（第 21 次）』
天理市教育委員会

橿考研 1983 「天理市平等坊・岩室遺跡第 6 次調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1982 年度（第 1 分冊）』
奈良県立橿原考古学研究所

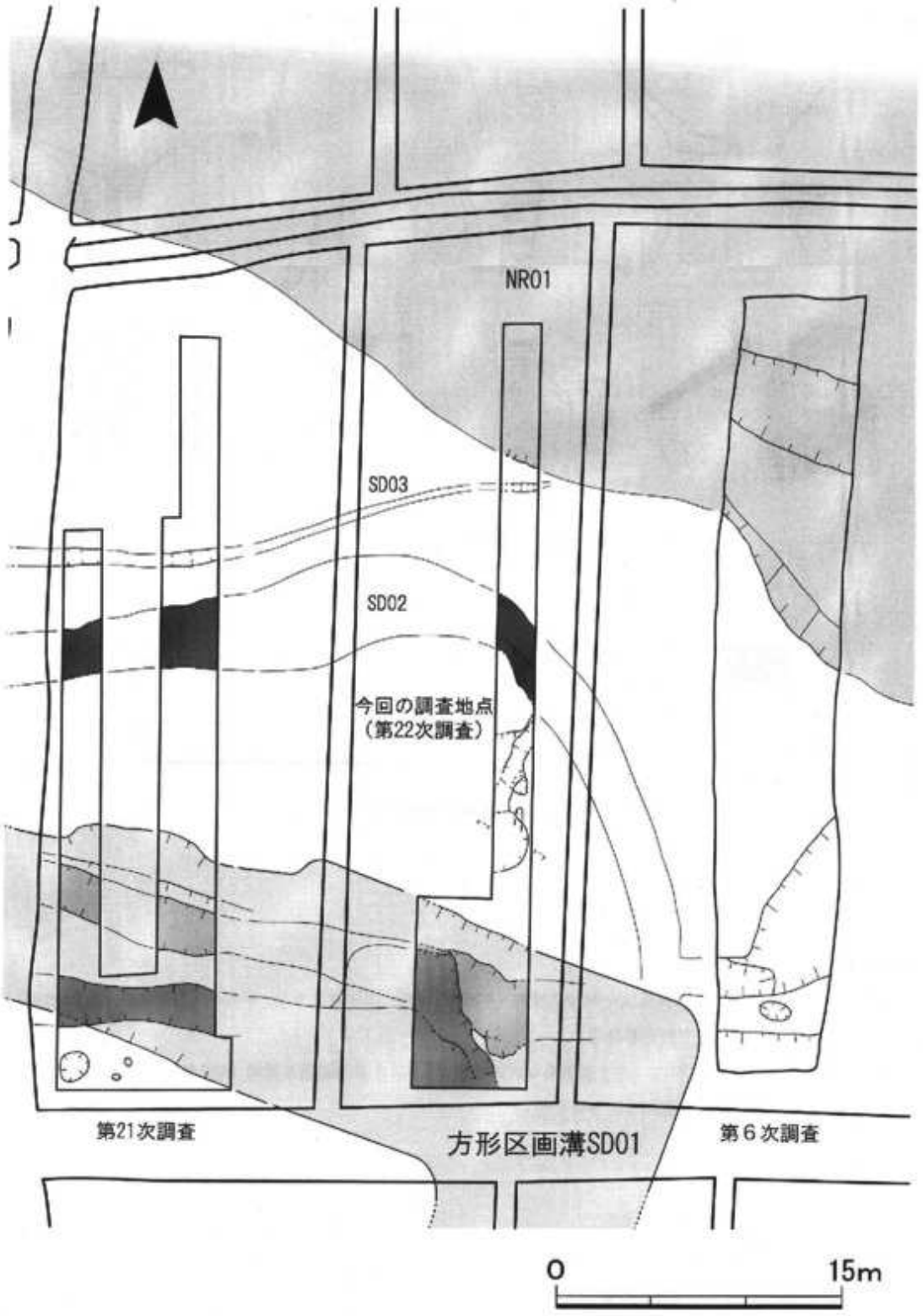


図13　集落北東部縁辺の状況　S=1/300

平等坊・岩室遺跡(第22次)出土遺物観察表

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量 口径・底径 器高(現存高)		残存率 出土地点 (口縁)		備考
1	須恵器-壺	N6/灰	やや密	やや良好	21.4	2.1	1/8	I区溝状落ち込み-SX01埋土	
2	土師器	10YR6/3にぶい黄橙	密	良好	15.8	3.4	復原完形	I区溝状落ち込み-SX01埋土	内面に油煙が付着
3	土師器-小皿	10YR8/1灰白	やや密	やや良好	9.4	1.0	1/3	I区溝状落ち込み-SX01埋土	
4	土師器-小皿	10YR8/3浅黄橙	密	良好	10.6	1.7	1/3	I区第四層下部～-SX01埋土上部	
5	土師器-小皿	10YR7/3にぶい黄橙	密	やや良好	8.2	1.5	1/2	I区第四層下部～-SX01埋土上部	
6	ミニチュア土器	7.5YR7/4橙	密	やや良好	4.8	3.9	1/2	I区第四層下部～-SX01埋土上部	
7	瓦器-椀	N2/黒	密	良好	15.6~5.6	5.1	1/6	I区溝状落ち込み-SX01埋土	
8	瓦器-椀	N6/灰	やや密	良好	13.0	4.2	1/4	I区第四層下部～-SX01埋土上部	
9	瓦器-椀	N6/灰	密	良好	14.8~5.6	5.5	2/3	I区第四層下部～-SX01埋土上部	
10	弥生土器-壺	7.5YR7/4にぶい橙	密	良好	9.0~3.4	12.3	完形	I区大溝SD01埋土	
11	弥生土器-壺	10YR7/4にぶい黄橙	かなり粗	やや不良	14.0	9.8	1/3	I区大溝SD01埋土	
12	弥生土器-高杯	10YR8/3浅黄橙	やや密	やや良好	27.0	4.2	1/6	I区大溝SD01埋土	
13	弥生土器-壺	10YR7/4にぶい黄橙	やや密	良好	8.5	6.1	2/3	E区(中央～南)溝SD02新支流堆土上層	
14	弥生土器-壺	10YR8/2浅黄橙	やや密	やや良好	14.4	6.3	1/4	E区(中央～南)溝SD02新支流堆土上層	
15	弥生土器-壺	10YR8/3にぶい黄橙	やや密	やや良好	15.6	5.1	1/2	E区(中央～南)溝SD02新支流堆土上層	
16	弥生土器-鉢	7.5YR7/6橙	やや粗	やや悪	34.0	7.4	1/4	E区(中央～南)溝SD02新支流堆土上層	
17	弥生土器-鉢	7.5YR8/6橙	やや密		36.2	18.4	1/3	E区(中央～南)溝SD02新支流堆土上層	
18	弥生土器-壺底	7.5YR6/4にぶい橙	やや密	やや良好	17.0~5.2	8.2	1/3	E区(中央～南)溝SD02新支流堆土上層	
19	土師器-鉢	10YR8/4にぶい黄橙(外) 7.5YR8/3橙(内)	やや密	やや良好	13.8	4.0	1/3	E区(北)溝SD03埋土	
20	埴輪	7.5YR7/3橙	やや密	やや良好	—	8.0	—	E区(北)溝SD03埋土	
21	弥生土器-壺	7.5YR7/4橙	やや密	良好	—	12.0	—	I区(南)大溝SD04埋土上部	
22	弥生土器-底	10YR8/3にぶい黄橙	密	良好	—	14.2	—	I区(南)大溝SD04埋土上部	
23	弥生土器-壺	10YR3/2黒褐	やや密	良好	24.4	8.3	1/3	I区(南)大溝SD04埋土上部	
24	弥生土器-壺	10YR6/2灰黄褐	やや密	やや良好	30.0	8.3	1/5	I区(南)大溝SD04埋土上部	
25	弥生土器-水差	7.5YR6/4浅黄橙	やや密	やや良好	7.8	8.3	口縁完存	I区(南)大溝SD04埋土上部	
26	弥生土器-壺蓋	10YR7/4にぶい黄橙	やや密	良好	8.2	1.1	完形品	I区(西)大溝SD04埋土上部	
27	木製品	—	—					I区(南)大溝SD04埋土上部	丸鍬の未成品か
28	弥生土器-壺	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	6.8	8.7	底部完形	I区(中央)大溝SD05埋土	
29	弥生土器-壺	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	12.4	8.3	1/3	I区(中央)大溝SD05埋土	
30	弥生土器-壺	10YR5/2灰黄褐	やや密	やや良好	7.4	2.6	1/2	I区(中央)大溝SD05埋土	試掘からの搬入品
31	弥生土器-壺	10YR6/3にぶい黄橙	やや密	良好	13.4	2.4	1/3	E区(北)自然河道NR01埋土	
32	弥生土器-底	7.5YR7/3橙	やや密	良好	5.0	4.5	1/3	E区(北)自然河道NR01埋土	
33	弥生土器-高杯	10YR6/4にぶい黄橙	密	良好	—	7.6	—	E区(北)自然河道NR01埋土	
34	弥生土器-高杯	10YR7/3にぶい黄橙	密	やや良好	—	9.8	—	E区(北)自然河道NR01埋土	
35	須恵器-壺	5Y5/1灰		良好	—	6.0	—	E区(北)自然河道NR01埋土	
36	埴輪片	5YR5/6橙赤褐		やや良好	—	2.8	—	E区(北)自然河道NR01埋土	須恵質埴輪
37	平瓦	10YR6/4にぶい黄橙		やや良好	—	—	—	E区(北)自然河道NR01埋土	
38	弥生土器-壺	10YR8/2灰黄橙	やや密	やや良好	—	11.6	—	I区(南)自然河道NR02埋土	

柳本立花遺跡（第２次）の調査

Ⅰ．はじめに

柳本立花遺跡は、天理市南部の大和・柳本古墳群周辺に展開する前期古墳群形成に関わる基盤集落群の一部となる集落遺跡である。これまで弥生後期末～古墳前期の遺物散布によりその存在が知られていたが、具体的な遺跡内容については調査の手が及ばず実態不明と言わざるを得なかった。近年になり漸く発掘調査の機会に恵まれ、平成12年度に実施した第１次調査では弥生後期末～古墳前期の遺構・遺物のほかに埴輪類や鉄鏃、石製腕飾類（緑色凝灰岩製石釧）等を伴う埋没前期古墳の周濠を検出し、その後の古墳後期以降の集落展開も確認されている(天理市教委 2001)。

今回の調査は、当遺跡範囲内において計画された個人住宅建設を契機として実施した事前確認調査である。調査地は第１次調査地の北西筋向いに近接した地点にあたり、前回調査時検出遺構群の拡がりを確認することを目的として調査を実施した。調査は調査対象地の東寄りに幅３ｍ、長さ15mの南北方向の調査区を設定して掘削、遺構確認に努めた。現地における調査は平成14年３月19日より開始し、同月26日にすべての作業を終了した。総調査面積は45㎡であった。

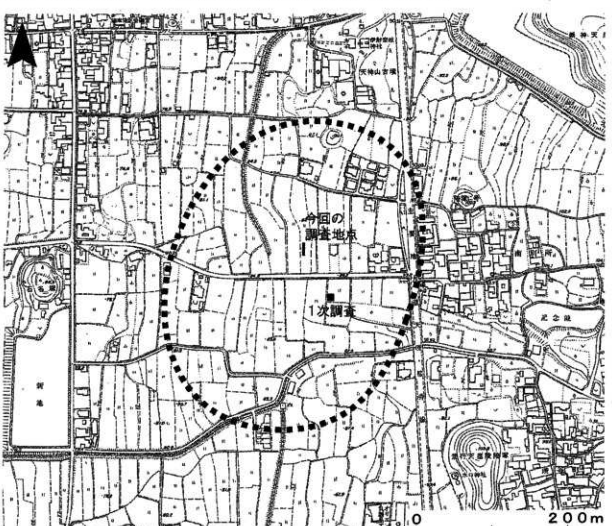


図14 柳本立花遺跡(第2次)調査地点位置図　S=1/5000

Ⅱ．調査の概要

1．層序と検出遺構

(1)基本層序

調査地における基本的な層序は次の通りである。

上位の**第Ⅰ層**（1）および**第Ⅱ層**(2)は、耕作土とそれに伴う床土であり、近現代までの水田耕作にかかる土壌と水田面に伴う下部の床土層となる。次の**第Ⅲ層**(3)は当該地における耕地化から継続的な耕作にかかる旧耕作土の堆積である。その下面から下位の**第Ⅳ層**(4)では地山相当の基盤層となり、調査区東端では硬質な砂礫土壌を成し西側傾斜面の下方では沖積堆積による砂質土壌の地山となる。

なお、当遺跡は天理市東部の東山麓より西方に延びる丘陵緩斜面上に立地しており、現状では段状に水田、畑地が形成されて耕地化がすすみ旧来の地形が大幅に改変を受ける状況にある。そのため今回の調査地近辺では**第Ⅰ層～第Ⅲ層**の耕地化以後の堆積層より下位では遺物包含層を介在せずに直下で**第Ⅳ層**の地山あるいは基盤層となっていた。従って、遺構検出面は地山面直上となり上位の耕作による削平により著しく破壊される状況が窺えた。

(2)検出遺構

上部遺構（素掘り小溝群）

第Ⅲ層旧耕作土の下面で検出した南北方向を基調とする耕作痕跡である。著しい重複関係が認められ長期にわたる耕地の維持が窺えるものである。希に東西方向の小溝も見られるが本数は少なく時間的な前後関係は把握できない。埋土中の遺物には微細な須恵器、土師器、瓦器片や埴輪片があり、概ね中世後期以後の耕作痕跡と考えられる。

土坑ＳＫ０１

調査区南側の第Ⅳ層基盤層上面で検出した最大径３ｍ弱の不整形な土坑である。西側の縁辺を前記の上部遺構により削平されており、深さも最深部で約 0.2m と浅い。土坑の底面では凹凸が目立ち、南側では局所的に窪みが見られた。埋土は上部が黒褐色砂混じり粘質土、下部が褐灰色粗砂混じり土である。遺物は埋土より円筒埴輪や形象埴輪の破片が少量の土師器皿等の中世土器片とともに出土している。遺構の性格としては近在した古墳を耕地化した際の破壊、削平時に出土した埴輪片の廃棄土坑と考えられ、その時期については共伴した土師器皿より 14 世紀前半代と思われる。

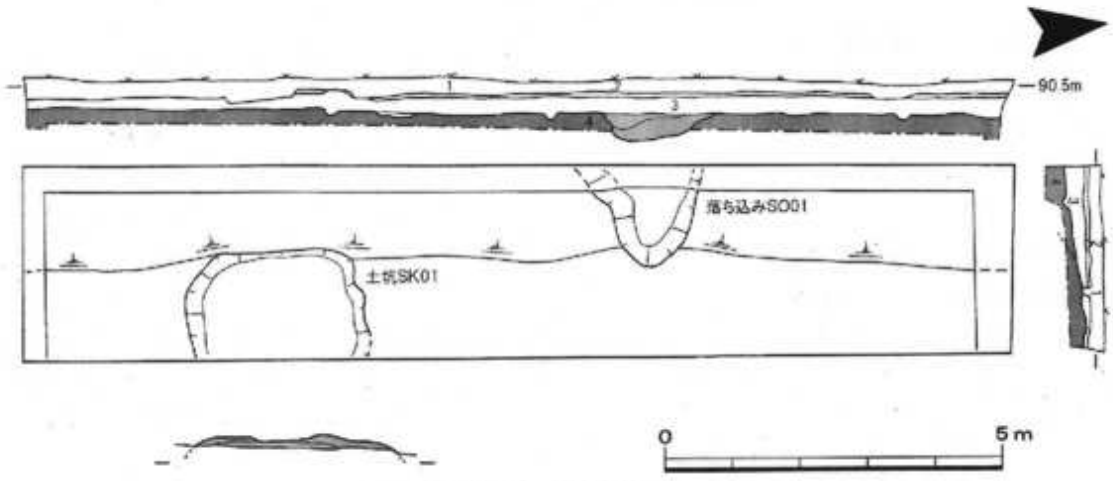


図15 調査区平面･土層図　S=1/100

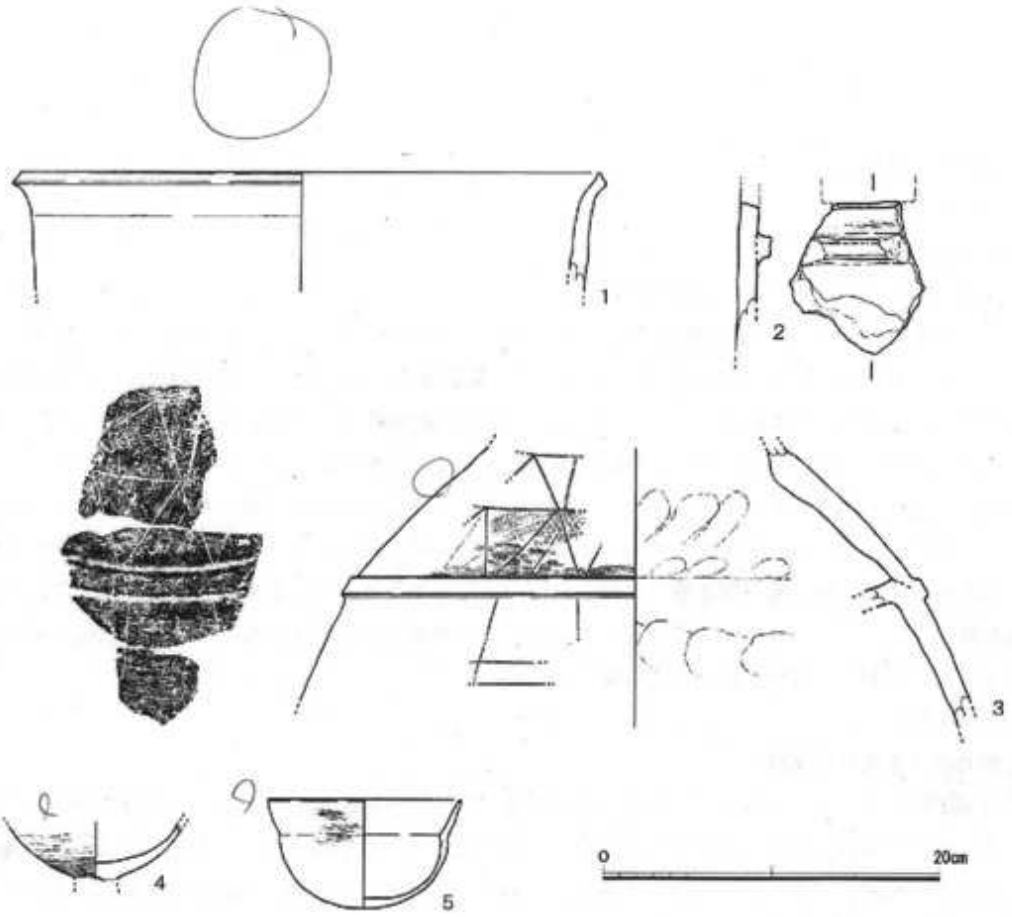


図16 出土遺物実測図 S=1/4

落ち込みＳＯ０１

調査区中央北寄りの西側で検出した落ち込み状遺構である。東西幅 1.5mの不整形な西向きに延びる落ち込みで底面は西側で深く約 0.4mを測る。埋土はにぶい黄橙色土で上半は砂質土、下半は粘土質シルトである。遺物は埋土下半からのみ認められ弥生後期末～古墳前期初頭の高杯、小型鉢等が出土している。埋土の状況から西向きの斜面下方に窪む微地形に沿った包含層の落ち込みと考えられる。

２．出土遺物

今回の調査における遺物の出土は少なく、総量はコンテナ約１箱にも満たない。以下、図示した遺構出土遺物についてのみ、その概観を記しておきたい。

土坑ＳＫ０１出土遺物

埋土中より少量の中世土器片とともに多くの埴輪片が出土している。埴輪片には円筒埴輪、形象埴輪があり、いずれも小片であるが接合可能な同一個体のものも幾つか含まれている。円筒埴輪では、口縁端をやや短めに屈曲外反させた口縁部片(１)や長方形透かし孔の穿たれた胴部片(２)も見られ、内面を削り調整するものも存在した。また、形象埴輪には外面に三角形や方形を基調とした線刻による装飾を加えた伏せ鉢状の形態(３)が見られた。

落ち込みＳＯ０１出土遺物

鉢、高杯等の土師器の破片が微量に出土している。高杯では椀形の杯部のみ残るもの(４)があり、内外面には精緻なヨコミガキが部分的に残る。おそらく形態から低脚高杯と思われる。鉢では完形に近い丸底の小型鉢(５)があり、外面の一部に精緻なヨコミガキが残る。これら２点の土器はほぼ同時併存するもので概ね庄内式期後半～末の帰属が考えられる。

Ⅲ．まとめ

今回の調査では、前回の第１次調査地北側の丘陵斜面における遺跡の拡がりと遺存状況を確認することができた。結果的には、中世以降の耕地化のために東側の丘陵斜面上では遺構面直上までに削平がおよぶのを確認したことになり、旧来の地形が広範囲に改変されていることが予測できよう。また、そうした耕地化の進行により柳本古墳群の一角が破壊され、現状の景観に近くなるのがほぼ中世後期頃と確認できたのも成果と言える。

当遺跡についての調査は未だ調査箇所も少なく、埋没前期古墳とその前後期の集落遺構のみが確認されているに過ぎない。今後は集落の存続期間や各時期ごとの範囲の確認が課題となろう。

参考文献

天理市教育委員会 2001 『天理市埋蔵文化財調査概報（平成 12 年度・国庫補助事業）柳本立花遺跡 ヲカタ塚古墳』天理市教育委員会

柳本立花遺跡（第３次）の調査

Ⅰ．はじめに

柳本立花遺跡は天理市南部の大和・柳本古墳群周辺に展開する古墳群形成に関わる基盤集落群に含まれる集落遺跡である。これまで弥生後期末～古墳前期の遺物散布によりその存在が知られていたが具体的な遺跡内容については調査の手が及ばず実態不明と言わざるを得なかった。近年になり遺跡範囲内における調査の機会が得られ、平成 12 年度実施の第１次調査で弥生後期末～古墳前期の遺構・遺物のほかに埴輪類や鉄鏃、石製腕飾類（緑色凝灰岩製石釧）等を伴う埋没前期古墳の周濠を検出している（天理市教育委員会 2001）。また、平成 14 年度の第２次調査でも古墳前期初頭の遺構と埋没古墳の埴輪を廃棄した中世後期の土坑を検出しており、遺跡東辺部の地形、土地利用の変遷が確かめられている。

今回の調査地は当遺跡範囲内の西端縁辺部に該当し、地形的には西側斜面地の途中に位置する。周辺では、北側に時期不明の小規模な古墳、西方に石名塚古墳やノベラ古墳等の前期古墳と考えられる古墳が近在し、これらに関わる集落遺構の存在が考えられた。そのため、当該地における遺構、遺物

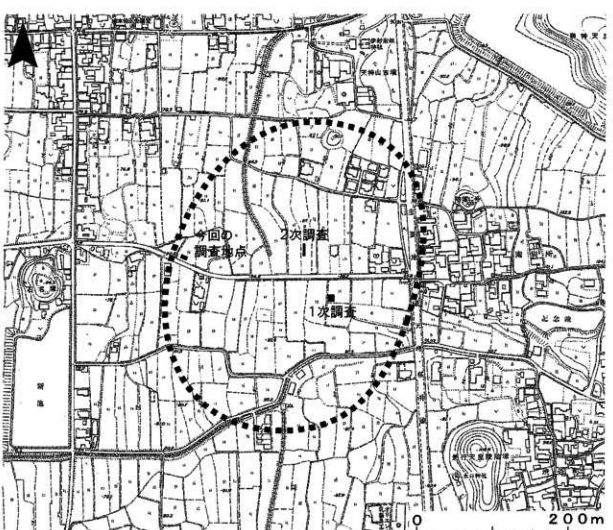


図17 柳本立花遺跡(第3次)調査地点位置図 S=1/5000

包含層の有無確認を目的として調査を進めることとなった。調査では、南北幅6m、東西長10mの東西方向の調査区設定をおこない、上部の造成土および耕作土・床土を重機で除去した後、以下の土層を対象に人力掘削による遺物包含層と遺構の確認に努めた。現地における調査は平成14年6月26日より開始し7月9日にすべての作業を終了した。総調査面積は60㎡であった。

Ⅱ．調査の概要

調査では、東側丘陵裾から西側へと下降する緩斜面地形上での遺構・遺物包含層の有無確認を目的として徐々に調査を進行した。以下、その概要を記す。

1．層序と検出遺構

(1)基本層序

緩斜面上方側の調査区東壁における層序を主体として当調査地の基本層序を示しておく。

現状では調査地全体にすでに造成土の客土がされており、調査区付近では厚さ約0.5m平均になっていた。以下は第Ⅰ層（1a・1b:耕作土）第Ⅱ層（2:床土）第Ⅲ層（3a・3b・3c:にぶい黄褐色砂質土）第Ⅳ層（4:にぶい黄褐色砂混じり粘質土）第Ⅴ層（5:黄褐色砂質土・地山）となっている。

調査区北東部の斜面上では前記の層順が基本となるが、南東～西半にかけての低地部では第Ⅳ層と第Ⅴ層の間に数時期にわたる耕作面を介在していた。

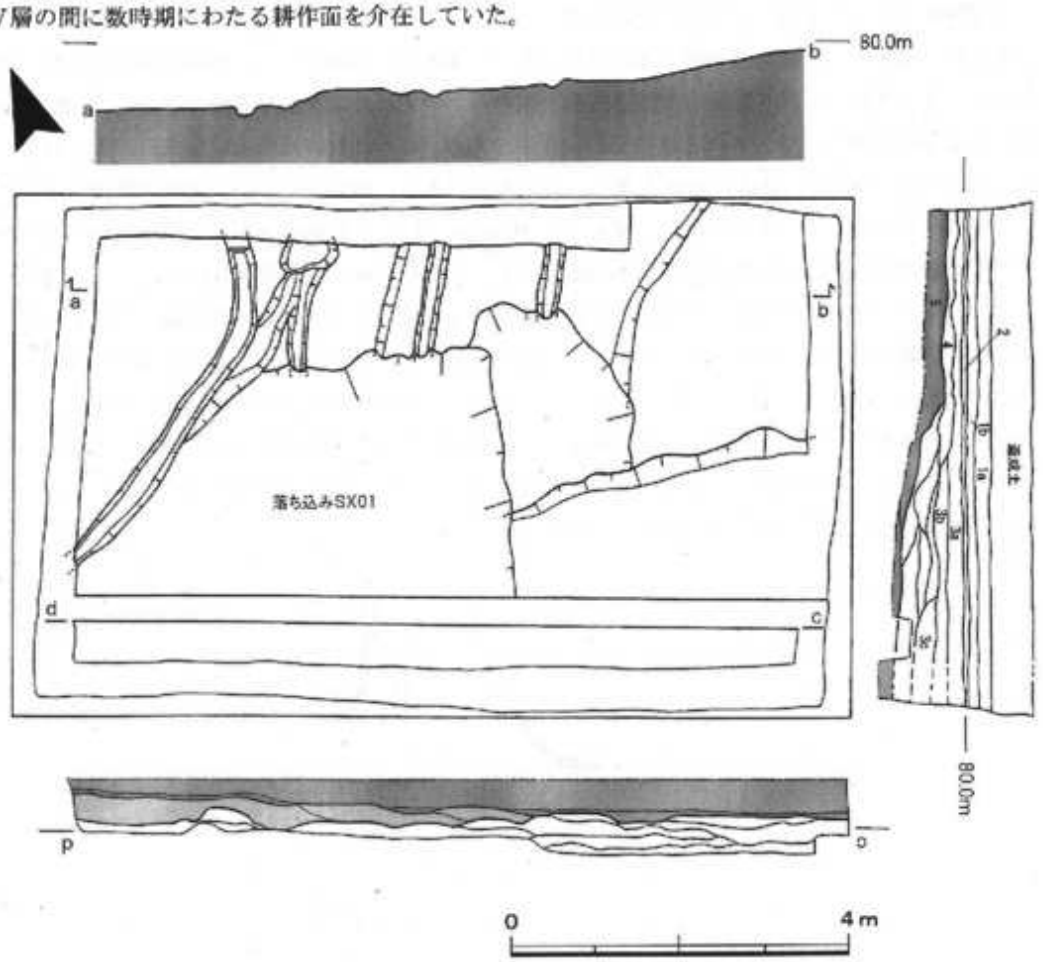


図18 調査区平面・土層図 S=1/80

(2)検出遺構

明瞭な遺構としては第Ⅳ層上面～第Ⅴ層地山面直上までに検出した耕作に伴う素掘り小溝群とこれらに先行する調査区西～西南側斜面下方側の落ち込み SX01 が確認されている。

素掘り小溝群には第Ⅳ層上面を検出面とする上層小溝群と下位の第Ⅴ層直上までの間層に掘り込み面が想定される下層小溝群の両者があり、それぞれに若干の方向性の相違が認められている。埋土はいずれも微砂、細砂混じりの砂質土が主体であり細かな土器片を包含する。下層小溝群では、埋土に含まれる土器片の時期幅も古墳前期から中世後期までに限られ、上層小溝群ではそれに加えて近世陶磁器片が混在する状況であった。従って、当地における農地化が中世後期頃に遡ることが検証され、その後の地割りの変化を概ね窺い知ることができよう

最下部の第Ⅴ層地山面検出の落ち込み SX01 は旧来の地形を示すものであるが急激に比高差をもっての落ち込みではなく平坦面に連なる深さ 0.6m前後のものであった。明瞭な平面形も示さず不整形なものであるため斜面地への移行を示す自然地形であると思われる。

2．出土遺物

第Ⅲ層および第Ⅳ層の遺物包含層、落ち込み SO01 埋土より小片を主体とした土師器、須恵器等の土器類が出土している。総量はそう多くはなくコンテナ2、3箱程度であった。以下、図示した落ち込み SO01 埋土出土土器についてのみ群述する。

1は弥生後期末～古墳前期初頭の壺底部片である。浅黄色の色調を呈し、焼成は良好である。内外面ともにやや摩滅しており器面の調整は外面下位のヘラナデ以外はあまり看取できない。底径 3.2cm、現存高 2.3cm を測る。2～4は古墳後期の須恵器である。2の杯身は図面上ほぼ完形に復元可能である。復元口径 10.0cm、器高 3.4cm を測る。3も杯身であり、短い立ち上がり部分の特徴等から形態的にほぼ同時期のものと考えられる。復元口径 10.6cm、現存高 1.7cm である。4は短脚の高杯脚部である。脚部外面には回転カキ目調整が明瞭である。底径 6.6cm、現存高 5.7cm である。これらの須恵器はいずれも灰白～淡灰色の色調で焼成良好、堅緻な状態である。5は円筒埴輪の小片である。突帯部分を剥離して欠くが接合部位に残された方形刺突痕跡が特徴的である。にぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含むものの焼成は良好である。おそらく前期古墳に伴う埴輪と思われる。

以上の土器類には弥生後期末～古墳後期までの長期間にわたる時期幅が認められる。これらの検出遺構である落ち込み SO01 の性格が人為的な掘り込みではなく自然地形の落ち込みであることを示しその埋没までの時間的経過を読み取れる土器群と言える。

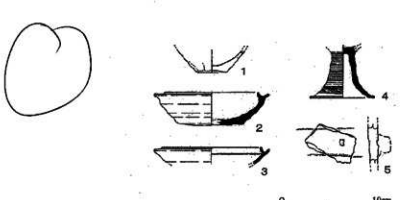


図19 出土遺物実測図 S=1/4

Ⅲ. まとめ

今回の調査では、立花遺跡西側縁辺における状況の確認を目的としたが結果的には古墳時代の遺構の存在は確認することができなかった。しかしながら、遺物包含層より古墳前期～後期の土器類の出土は豊富に認められたため遺構のほとんどは中世後期以降の耕地開発のために削平されたことが予想され、かつては遺構群の拡がりが調査地近傍までに見られたことも考えられた。地形的にも今回の調査地付近が斜面地形から平坦地への傾斜変換点に近いことからも遺跡の西端に該当する認識は変わらず、今後の周辺地の開発行為に関しても遺跡範囲内として留意すべき点が多いことを再認識しておきたい。

参考文献

天理市教育委員会 2001『天理市埋蔵文化財調査概報（平成 12 年度・国庫補助事業）柳本立花遺跡 ヲカタ塚古墳』天理市教育委員会

平等坊松ノ木遺跡（第２次）の調査

Ⅰ．はじめに

天理市の中央部、近鉄天理線の前栽駅から西方 300mの所に平等坊松ノ木遺跡が存在する。この遺跡は、昭和 60 年に天理教調査団が実施した発掘調査によって遺構が見つかり、弥生時代後期末から古墳時代初め頃、他に中世の遺跡であることが判明した。平等坊松ノ木遺跡の南方 300～400mには、弥生時代前期から古墳時代まで展開する弥生時代の環濠集落平等坊・岩室遺跡が所在し、距離的にも近い立地関係にあることから考古学的には遺跡間の関係が注目される。しかし、平等坊松ノ木遺跡は発掘調査例が少なく、遺跡の様子を伝える資料が乏しいため、遺跡の特徴を十分比較するまでには至っていない。

遺跡の所在地は、現在の布留川北北流が流れる水田地帯となる。平等坊・岩室遺跡の調査では、布留川を水源とする幅 50m～80mの大規模な河川跡が見つかっており、平等坊松ノ木遺跡は調査で検出した布留川跡の北方に立地した遺跡となる。平等坊松ノ木遺跡から北方 300mの小路町と南六条町との間にある水田地帯には、幅 50mほどの東西に延びる谷地形が看取され、天理市北部の石上・豊田山丘陵地帯から流れる水系の痕跡である。平等坊松ノ木遺跡は、こうした布留川水系と石上・豊田山丘陵に水脈をもつ水系との境目に立地した遺跡で、平等坊・岩室遺跡を中心とした周辺遺跡の様子を知る重要遺跡の一つである。

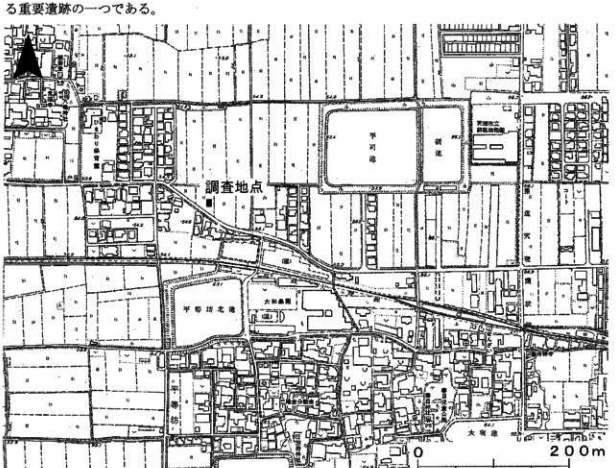


図20 平等坊松ノ木遺跡調査地点位置図 S=1/5000

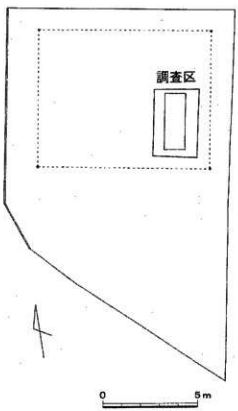
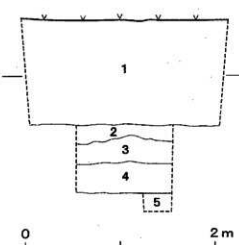


図21 調査区位置図 S=1/200



1. 黄色土(盛土)
2. 暗青灰色土(灰色砂を含む)
3. 淡黒灰色粘質土(土器片をわずかに含む)
4. 淡緑灰色粘土(マンガン斑文を含む)
5. 黒灰色砂質粘土

図22 調査区土層図 S=1/40

Ⅱ. 調査の概要

宅地予定地（約 500 ㎡）の内、その北東部に約 8 ㎡の調査区を設定し、遺跡の検出に努めた。調査地点は、既に盛り土造成がなされており、およそ１mの盛り土を伴っていた。

盛り土直下には、耕作土が認められず、造成の際に耕作土壌などの除去を行っているようだ。標高 54.2m、盛り土直下には暗青灰色土（図 22－２）があり、その直下、標高 54m地点から土器片を含む淡い黒灰色粘質土（図 22－３）を伴う。同土層に伴う土器破片は僅かだが、平等坊松ノ木遺跡の存在を示す土層である。黒灰色粘質土の直下には（図 22－４）を伴うが遺構を検出していない。調査区の範囲が極めて狭いため、遺構の有無については十分な調査とはいえないが、調査の限りにおいて遺構は認められない。また包含層の土器破片も非常に少ない。古墳時代の包含層と思われる。

Ⅲ. まとめ

昭和 60 年の同遺跡における発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代初め頃の土器や遺構、中世の柱穴遺構などが出土している。今回の調査地点から南西 100mにあり、さほど距離を隔てた位置関係ではない。今回の調査結果では、包含層に伴う遺物がとても少なく、遺跡の中心部からややへだてた感じを受ける。また、調査面積が十分でないため、遺構の様子についても定かでない。近頃の調査では、土器などの遺物の出土量が少なくても弥生時代の方形周溝墓などの遺構が見つかる場合があり、今回の調査成果もそうした点を考慮して、平等坊松ノ木遺跡の広がりを示す調査成果としておく。

平等坊環濠遺跡の調査

Ⅰ．はじめに

平等坊環濠遺跡は天理市平等坊町所在の環濠集落跡である。現状の地割や地形の状況からやや不整形な平面形状を呈した小規模な環濠集落あるいは環濠屋敷と考えられるが、これまでに発掘調査等による確認は全くおこなわれておらず不明な点が多い遺跡でもあった。

今回の調査は、環濠推定ラインに近接した地点において個人住宅建設に伴い実施したものであり、当遺跡で最初の発掘調査となった。調査では環濠推定地の直上に調査区を設定する関係から濠底の確認を予想して鋼矢板で囲んだ深掘り調査区を設定し、その後に引き続いて環濠の平面形状を確認する目的で小規模な調査区を追加しながら調査を進行した。

Ⅱ．調査の概要

1．層序と検出遺構

調査地における基本層序は次のような状況となっている。現地表面下 0.4m までには最上部の近現代

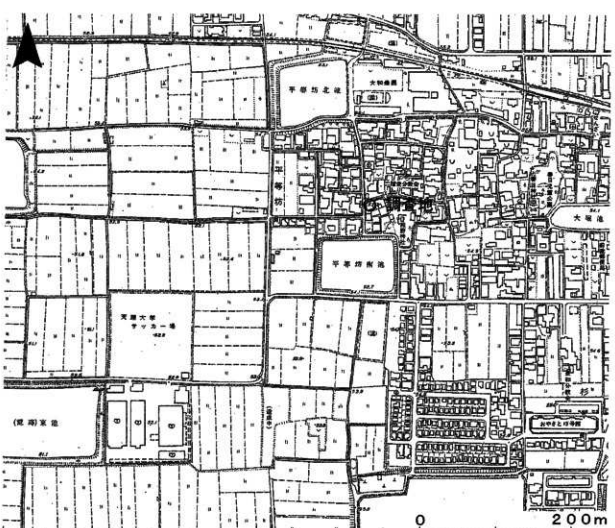


図23 平等坊環濠遺跡調査地点位置図　S=1/5000

図24 調査区配置図 S=1/300

写真２ 環濠最上面出土のガラス瓶

整地土層があり、最近までの木造家屋に伴う造成土となる。その下位では最深部で0.8m前後の深さまでに近世の整地土層があり、その下面において調査の目的とした環濠埋土の上面を確認するに至っている。環濠埋土の詳細については土層図に示した通りであるが、埋土の上部および下部上半では近世の遺物出土が目立ち、全体として中近世遺物の混在が認められている。

遺構では当初の目的である環濠大溝とこれに平行した配置で時期的には後出する近世以降の南北小溝等を検出している。

環濠大溝は、調査地の西辺および北辺を取り巻くような状況で検出されており、部分的にのみであるが環濠内郭の輪郭と環濠の平面形状を確認することができた。環濠大溝の濠幅については、外方が調査区外であるため明確に把握することはできなかったが、調査区内で７m弱までを検出しており、現状地割からはほぼ10m前後と推定される。また、深掘り調査区では現地表面下約２m前後で検出面からは約１mの深さまでに濠底面を確認しており、北調査区検出の深さ0.5mに満たない浅い濠底レベルとの際立った差を見せていることが特徴的である。すなわち環濠底面の深さが当初より北辺と西辺では異なる点が確認され、配置の方向による起伏から出入り口等を意識した構造を示すものと考えられた。なお、環濠大溝の埋土からは中世後期(室町～戦国時代)～近世の日常雑器類や植物遺体、瓦類等の遺物を多く検出している。また、濠検出面の最上部直上の岸辺では昭和41年５月製造の刻印の見られるヤクルトのガラス瓶が出土しており、環濠の窪みが残存した時期の下限を示している。

次に、南北小溝は環濠内郭の建物あるいはその地割に伴う溝と考えられるが、掘り込み面が上位の近世整地土上面であるため、環濠埋没後に環濠大溝平面の配置を踏襲するかたちで掘削されたものと思われる。

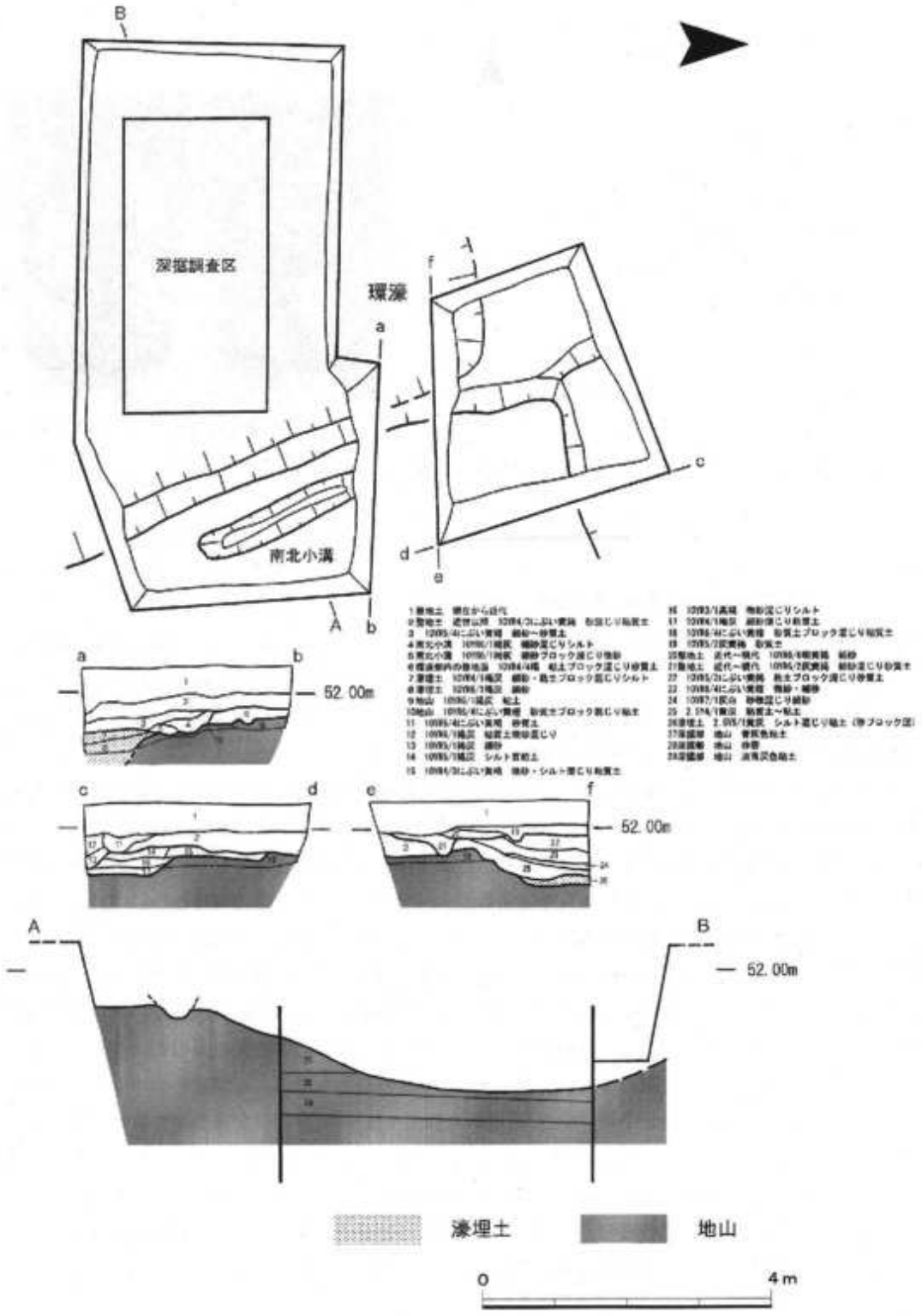


図25 調査区平面·土層図 S=1/80

2．出土遺物

調査では環濠相当の大溝のみを検出しており、埋土からは多量の中近世日常雑器類および弥生～中世前期(鎌倉)の混入土器片が少量出土している。また、土器類以外にも木製品や銭貨類の出土も見られた。総出土量はコンテナ13箱分であった。以下、図示したもののみ概観し詳細は観察表にまとめておいた。

土師質土器類（1～45）

1～32は土師質皿である。1～12は突き上げ底の皿で、口径、器高ともに小さな皿が多い。33～44は土師質土釜である。白色系の胎土の33～39・42～44と赤色系の40・41に分類可能である。量的には白色系が大半を占め、赤色系はわずかである。白色系の土釜は器壁が薄手で、口縁端部をつまみ上げており、赤色系では器壁が厚く口縁端部は平坦に仕上げられる。42～44は口縁端部を平坦に仕上げるため後者に分類すべきであるが、白色系の胎土をもつ。45は土師質炮烙である。色調は橙色で、口縁部は直立気味で、体部上方に断面三角形の貼り付け突帯が巡る。

瓦質土器（46～73）

瓦質土器の色調には灰白色系、橙色系、黒色系の3種が見られる。

46～56は摺鉢である。摺鉢には破片が多く、全形を窺える資料はない。体部が内湾気味に立ち上がり、6～8条を一単位として櫛状工具で施された摺目が認められる。外面はナデ調整が一般的で、53にのみハケ目が残る。形態的には口縁が内湾しながら緩やかに立ち上がる46～48・54と、口縁端部付近で垂直気味に立ち上がり、端面内部に明確な面をもつ49～52・55に分類可能である。

57～59の火鉢では、外面に文様を施す58・59と無文の57があり、ともに断面半円状の貼り付け突帯を2条巡らす。57の角火鉢は内外面ともに丁寧なナデ調整が施されており、口縁内側にわずかに煤の付着が残る。58には外面に記号様の押捺があるが、意匠については不明である。59の外面には渦巻状文様が押捺されている。

60～69、74～77の雑器類では、60～63・68が大型深鉢に、64～67がその底部、また、69が大型甕、74～77が浅鉢、盤あるいは火消し壺の蓋としてそれぞれに考えられる。深鉢口縁には、内湾させ端部を平滑に仕上げた60～63、口縁端部付近に屈曲をもつ68の2種類が見られるが、どちらも内外面ともに丁寧にナデ調整される。底部のみ残る67の外面にはハケ目状の痕跡がみられる。70・71は瓦質土釜であり、いずれも口縁端部が垂直に立ち上がる。ハケ目も残るが、内外面ともに丁寧にナデ調整される。72・73の香炉ではいずれも外面に縦方向ミガキを施し、四菱文様が押印される。72の体部が垂直に立ち上がり、口縁端部付近で明瞭な屈曲部をもつのに対し、73では外傾しながら立ち上がり、口縁端部に面をもつ。78の土管では小穴の穿孔が見られる。79～81は鉢等を打ち欠いた円盤である。

陶磁器類（82～107）

82・83は信楽焼摺鉢である。表面は鉄泥で化粧され、赤灰色を呈する。内面の摺目は7条を一単位として施される。84は瀬戸・美濃系天目茶碗である。体部が垂直気味に立ち上がり、口縁端部は強く外反する。85・86は唐津焼椀である。内外面に緑色釉を施釉する。いずれも高台は削り出しで無釉である。85の椀は火を受け釉が白色化する。87～95は肥前系磁器である。87～89は一重網目文染付け椀で、口縁部には圏線をもたない。88・89は内外面の色調が灰色に近く、呉須もくすんでいるが、87は

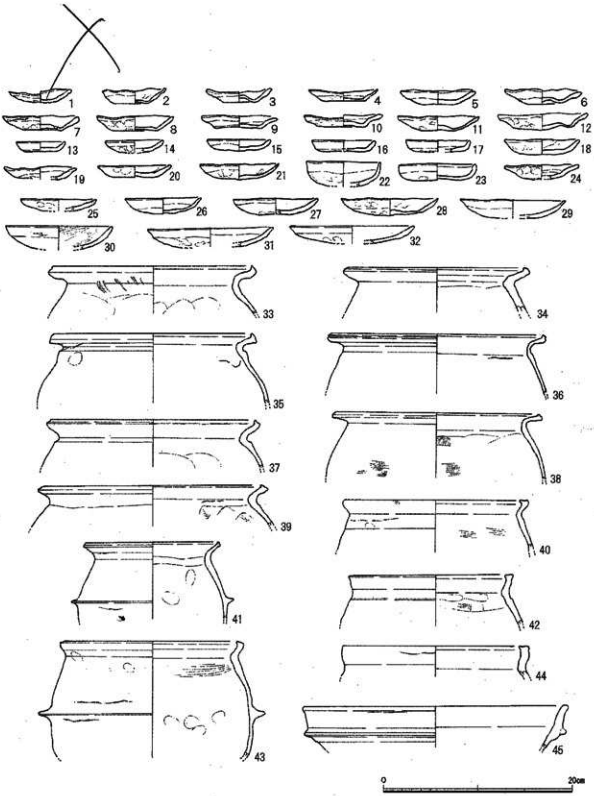


図26 出土遺物実測図1 S=1/4

内外面も白っぽく、呉須も綺麗な青色をしている。90～95は草花文様の椀の一群である。90の磁胎は乳白色を呈し、呉須も若干くすんでいる。見込みに粘土あるいは釉の塊が付着する。92は表に松、裏には遠山を描く。90を除き、草花文様の椀は磁胎が白く、呉須が綺麗な青色を呈するものがほとんどであった。96は輸入青磁の破片である。磁胎が紫灰色を呈し、国産のものとは明らかな違いが見られる。外面には蓮弁が線刻される。今回の出土遺物中で輸入品と断定できるものはこの1点のみであった。

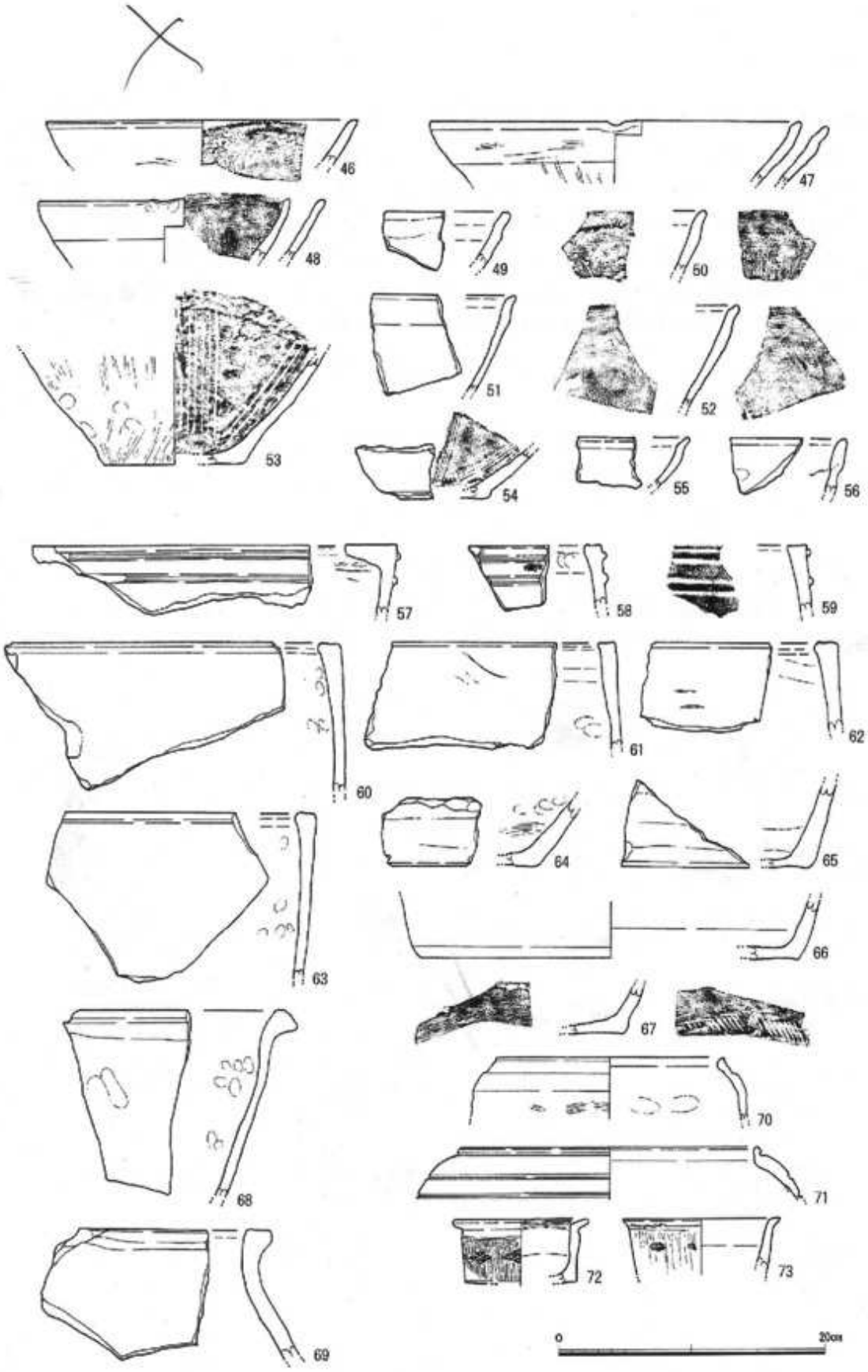


図27 出土遺物実測図2 S=1/4

97の端反椀は輸入品の可能性もあるが、産地は不明である。口縁、高台部分には圏線が巡り、見込みは文様が描かれるが、破片のため意匠は判然としない。高台は削り出しで、無釉である。内外面には貫入が見られる。器壁は灰色っぽいが、呉須の発色は良い。98の椀には、見込みに「寿」の文字がある。高台は削り出し、内外面に貫入が見られる。磁胎は白く、呉須の発色も良く綺麗な青色を呈する。文様は、破片のため不明。99は端反りの皿。磁胎は白く、呉須の発色も良い。口縁に向かい緩やかに屈曲し、口縁端部は茶色を呈する。高台の径は大きいが、器高は低く、高台畳付は無釉である。100の皿には乳白色の施釉と内外面の貫入が見られる。高台は無釉で径も小さく高さも低い。また高台畳

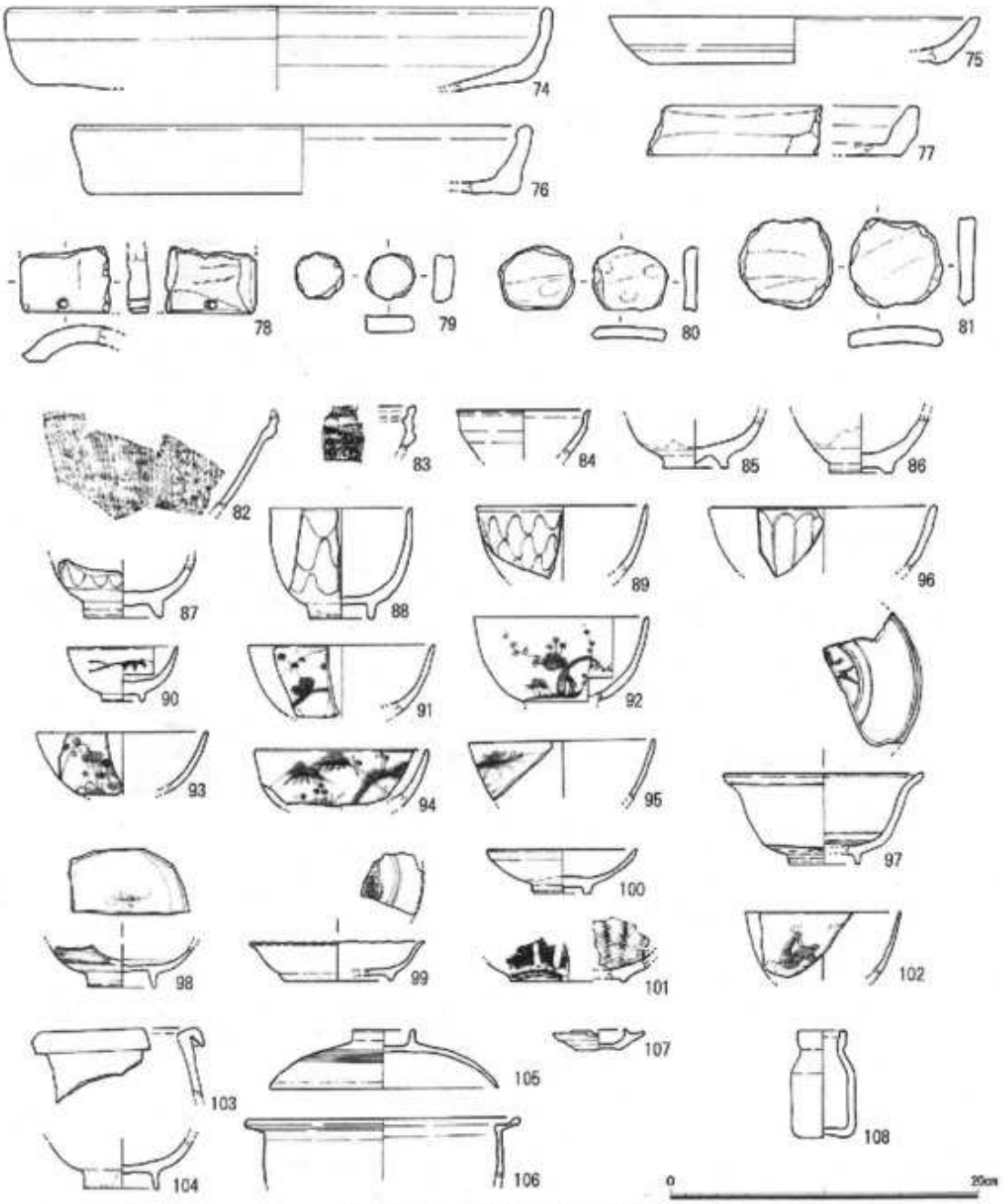


図28 出土遺物実測図3 S=1/4

付に、おそらく４ヶ所（確認できるのは３ヶ所）の斜めの切れ込みがある。高台畳付の突出部分には体部と同じ釉薬が付着しており、トチンの代わりにしたと考えられる。**101** の小皿は内外面に透明釉がかかる。高台は低く、高台畳付は無釉。内面には花弁を表した凹凸が見られ、外面にも同様の凹凸がある。**102** は鹿の絵が染付けされた椀である。内外面に貫入が見られる。磁胎は白く、呉須も綺麗な青色をしている。**103** は国産白磁の壺かと思われる。**104** は国産青磁椀である。器壁には薄い青色の

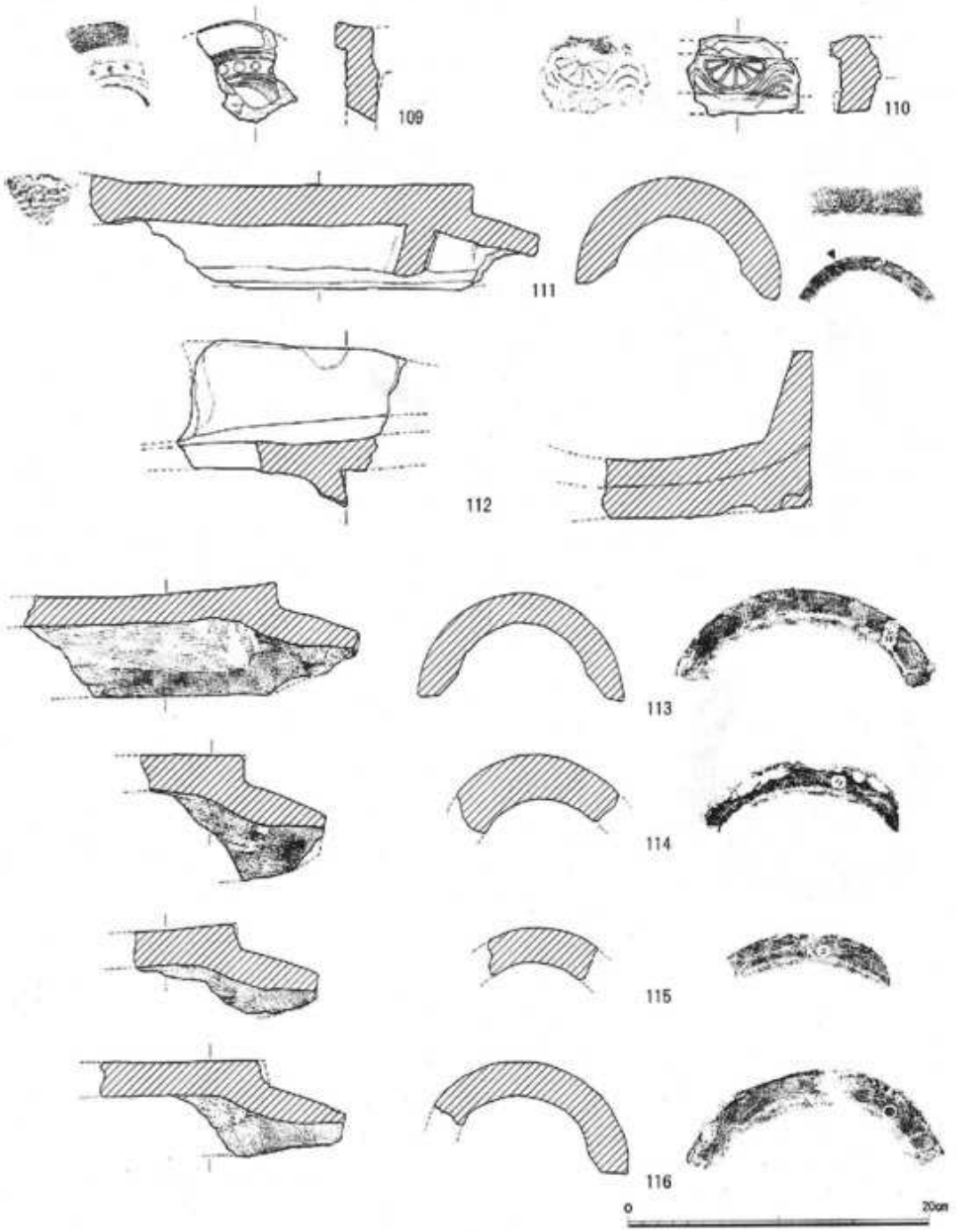


図29 出土遺物実測図4 S=1/4

軸薬がかかり、内外面に貫入が見られる。高台は基本的に無釉で、砂が付着する。105・106は赤膚焼の蓋と行平鍋である。オリーブ色の釉がかかり、内外面に貫入が見られる。径が若干合わないため同一個体ではないが、本来的には対を成すものである。107の燭台は内面のみに施釉、貫入が見られるが、外面はほぼ無釉である。108はヤクルトのガラス瓶である。底部に“41．5”の数字（製造年月）が刻印されている。

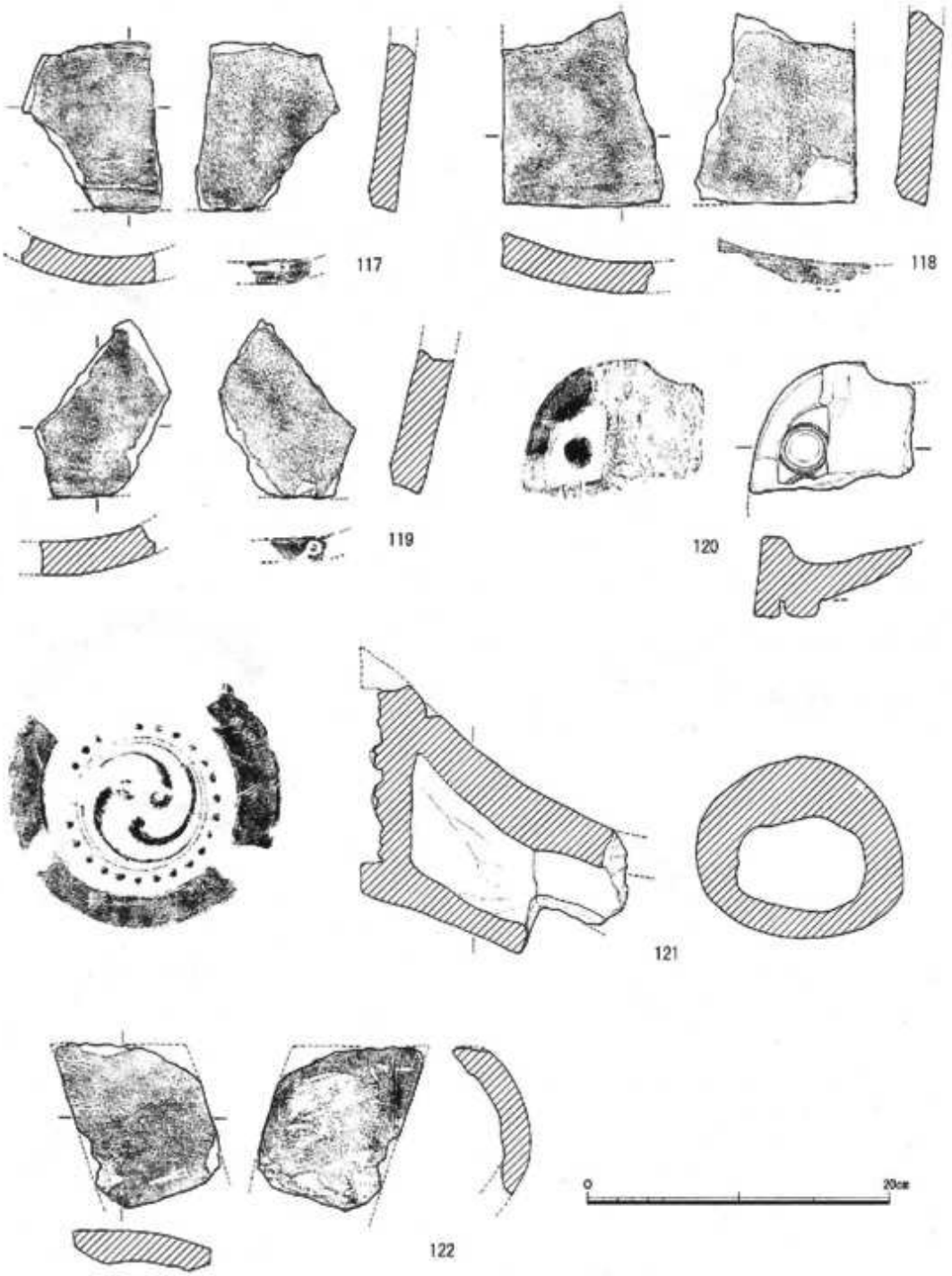


図30 出土遺物実測図5 S=1/4

瓦類（109～112）

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦の破片、鳥衾瓦、面戸瓦等がある。

109 は軒丸瓦の瓦当片で左巻き三巴で内外に圏線をもつ。巴の尾は圏線に付かない。111 は軒丸瓦の丸瓦部分で滑り止が付く。凹面には布目痕が残り、玉縁側縁凸面から胴狭端部にかけて面取りが見られる。狭端縁凸面の矢印の位置には三本線の線刻が見られる。109 の瓦当裏面、111 の丸瓦先端には両者の接着を良くするために入れたキザミが残ることから両者ともに少なくとも室町後期以降の時期が考えられる。110 は軒平瓦の瓦当片である。全体は残っていないものの、文様は半截菊花文と考えられる。残存部分は端の方と推測され、菊花は６弁で輪郭は線表現されている。菊花の両隣には３本の波状文がみられる。瓦当は貼り付け技法で作られており、瓦当上縁と顎後縁に面取りがされている。凹面にはナデ消されているものの布目痕が残る。この瓦当と同様の文様構成を持つものが法隆寺の瓦にみられ、山崎氏により中世Ⅶ期（室町中期）に位置づけられていることから、この瓦も同様の時期と思われる。112 では瓦当は残らないものの、滑り止めの横桟が付いていることから軒平瓦であったことがわかる。この横桟がつく瓦は室町以降に見られるようになる。113～116 は狭端部凸面に刻印をもつ丸瓦片である。全て凸面縄叩きの後にナデ消しがされ、玉縁側縁凸面の面取りが胴狭端部まで一気にされている。凹面には布目痕が残る。これら丸瓦の時期は室町中期と思われる。

120 は鬼瓦の破片である。珠文の部分しか残っていないが立体的で室町時代のものと思われる。

121 は鳥衾瓦で瓦当は左三巴で内圏線のみである。巴の尻尾は 109 同様圏線に付かない。珠文の数は 25 個である。瓦当はほぼ正面を向いており、外縁は平滑に仕上げられ、凸面も丁寧に磨かれている。凹面には布目痕が残り、一部後からナデ消されている。時期は室町中期頃と思われる。

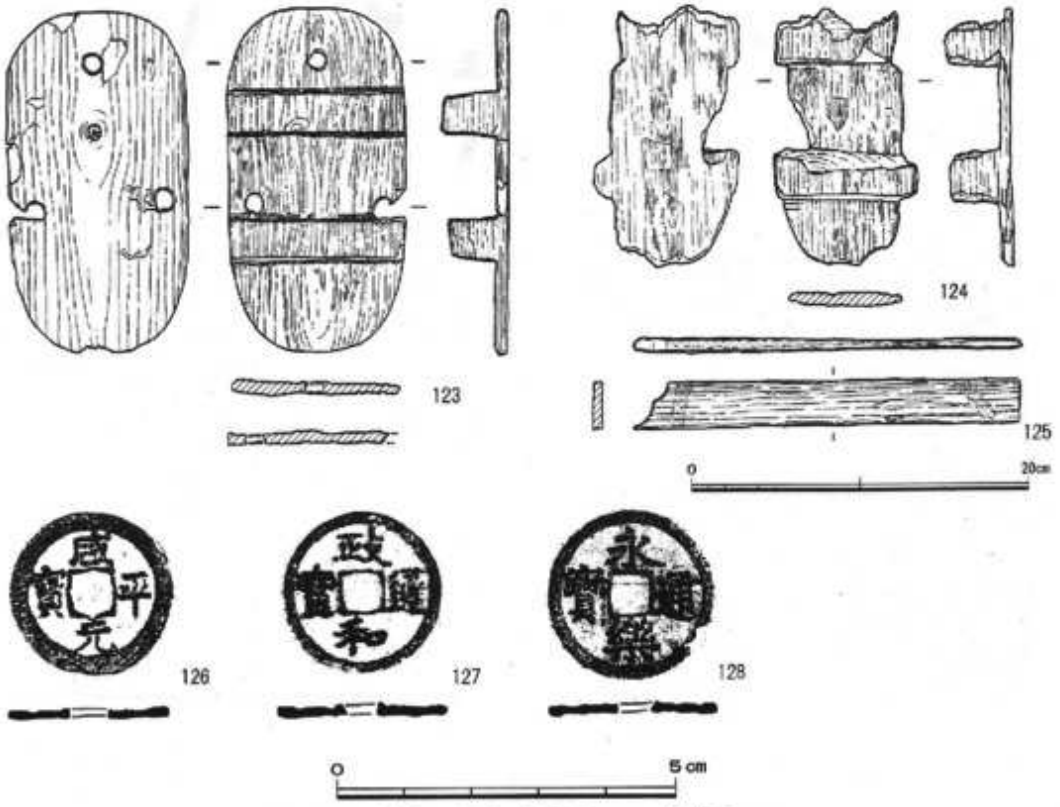


図31　出土遺物実測図6　木製品S=1/4　銭貨類S=1/1

117～119 は端面に刻印を持つ平瓦である。目立った特徴も見られない。122 は面戸瓦で、形は平行四辺形をしている。残っている三隅はしっかりと面取りされており、凸面も丁寧に仕上げられている。凸面に刻印がされている。これら平瓦と面戸瓦の時期は良く分からないが他の瓦の時期から室町時代の範疇に収まるだろう。

木製品（123～125）

123 および 124 は下駄である。いずれも一木からの削り出し加工による整形で製作されている。欠損の著しい 124 には穿孔部分が見られないため製作途中であったことが窺える。125 の板材には外面に赤色顔料の塗布による文様風の装飾が認められる。用途については不明であるが建築材の一部とも考えられる。

銭貨類（126～128）

126 は咸平元寶で初鋳年は北宋の 998 年である。文字ははっきりとしている一方、孔が若干歪な形をしている。127 は政和通寶で初鋳年は北宋の 1111 年である。銭文の書体は隷書で、摩滅のためか読みづらくなっている。128 は永樂通寶で初鋳年は明の 1408 年である。形態も整っており文字もはっきりと読み取ることができる。3 枚とも中国からの輸入銭と思われる。

濠内混入遺物（129～141）

129～131 は甕の底部、132 は高杯の脚部、133 は短頸壺である。いずれも弥生中・後期の土器片である。129 のみ外面にタタキが施され、130・131 は摩滅が著しく、ナデの痕がわずかにのこるだけであった。132 の高杯は摩滅が酷く調整は不明。

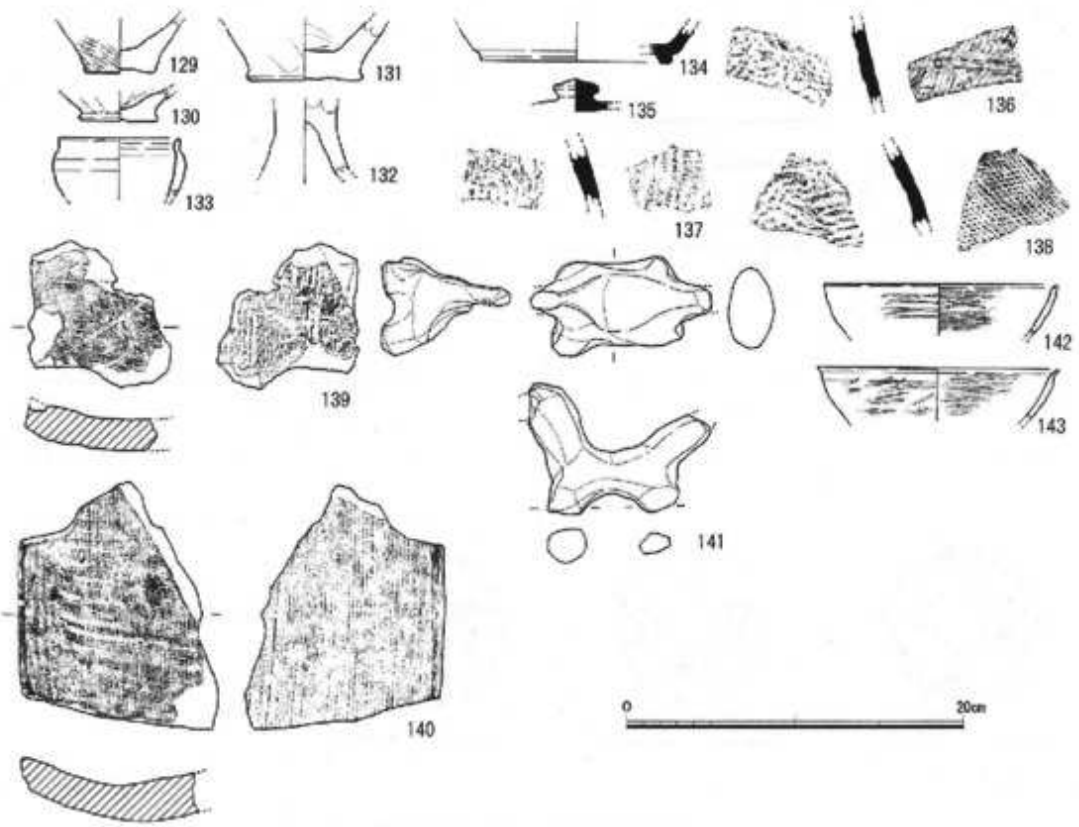


図32 出土遺物実測図7 S=1/4

134～138 は須恵器片である。細かな破片のみであるが、134 は椀の底部、135 は蓋のつまみ部分、136～138 は壷か甕の体部と思われる。内面には当て具の圧痕、外面にはタタキの痕が見られる。

139・140 は古代の平瓦である。139 は凸面には縄叩きの痕がみられ、凹面には布目と桶の圧痕が残る。140 も凸面に縄叩きの痕が残る。凹面には布目の痕が残るが、一部ナデ消されている。

141 は土馬である。土馬は外面をナデ調整する以外は磨滅が著しいため不明である。

142・143 の瓦器椀は口縁端部が外反し、内側に段を持つ、いわゆる大和型と呼ばれるものである。内外面のミガキは初期の段階と比較すると随分省略され、ミガキの単位を肉眼で確認できる。外面には斜め方向のミガキは見られるものの、随分粗くなっている。帰属時期は 12 世紀から 13 世紀前半までに収まると考えられる。143 の瓦器椀は 142 に比べ、口縁の反りが強い。

Ⅲ．まとめ

今回の調査は、平等坊環濠における初の発掘調査であった。平等坊環濠の平面形については南北の濠の輪郭が現況の地割りを踏襲するものの、東西ではやや南下がりの方形を呈することを確認している。調査では、調査区外の道路面地下に外郭肩部が延びるため、濠幅等の実態は不明なままとなったが、深さ約２m強で東西濠が深く、南北で約 1.2m と浅くなることがわかった。さらに地割からは西辺に近接した現集落内の道路が旧来のままであり、濠の深さも浅いことから出入り口の方向を示すものと考えられた。

出土遺物の検討からは、濠内遺物の時期が室町～戦国の中世末期が主体となり多くの瓦類等の寺院関連遺物をも含む点から寺社を取り込むかたちでの環濠内部の構造が知られ、竹や葦等の自然遺物から周囲に生垣を巡らす当時の景観が窺えた。

以上のように、環濠北西隅の小規模な調査であったため、環濠規模等についての確定要素は少ないものの東側に隣接する神社の東南縁辺に残る濠状落ち込みとの連続性からほぼ一辺 50m前後の方形の環濠屋敷地としての全体像が想定される。周辺については旧村落の個人住宅が密であり、宅地造成等による現況の急変は無さそうな状況であるため、今後に調査の機会に恵まれることはあまりない地点と言える。今回の調査成果と併せて現況地割りからの検討も加えつつ環濠について考える必要があり、今後も周辺の小規模開発のたびに留意すべき点の多い遺跡と言える。

平等坊環濠出土遺物観察表

土師器・瓦質土器

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量 口径・底径	法量 器高(残存高)	残存率(口縁)	出土地点	備考
1	小皿	2.5YR6/2灰黄	密	良好	6.4～7.0	0.8～1.4	完形	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
2	小皿	10YR8/3浅黄橙	やや密	良好	6.3～6.6	1.3～1.5	11/12	南調査区拡張部整地土（I層）	
3	小皿	10YR7/2にぶい黄橙	密	良好	6.7	1.0～1.5	完形	南調査区深掘部 埋土下半～濠底面直上	
4	小皿	5YR6/1灰	密	良好	7.4	0.9～1.2	1/2	北調査区濠埋上部 （灰色砂～灰黒粘土）	
5	小皿	10YR8/3浅黄橙	密	良好	7.5	1.3	1/2	南調査区拡張部整地土（I層）	
6	小皿	2.5Y7/2灰黄	密	良好	7.9	1.2～1.4	2/3	南調査区深掘部 濠埋土下半～濠底面直上	
7	小皿	2.5Y7/2灰黄	密	良好	8.0	1.4	完形	北調査区濠埋土上部	
8	小皿	10YR7/1灰白	密	良好	8.0	1.5	3/4	北調査区部内上部整地土層	
9	小皿	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	8.0	0.9～1.3	1/2	南調査区拡張部整地土（I層）	
10	小皿	7.5Y6/2灰黄	密	良好	8.0～8.9	0.9～1.2	完形	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
11	小皿	2.5Y5/3黄褐	密	良好	8.6	1.5	1/2	南調査区深掘部濠埋土下半～底面	
12	小皿	2.5Y6/1黄灰	密	良好	9.2	1.6	1/2	北調査区濠埋土上部	
13	小皿	5YR6/6橙	密	良好	5.2	1.0	1/3	南調査区拡張部	
14	小皿	10YR8/4浅黄橙	密	良好	6.0	1.3	1/2	南調査区拡張部	
15	小皿	2.5Y7/2灰黄	密	良好	6.5	1.2	1/4	北調査区濠埋上部 （灰色砂～灰黒粘土）	
16	小皿	7.5YR6/6橙	密	良好	6.4	1.1	1/3	南調査区拡張部整地土（I層）	
17	小皿	7.5YR6/6橙	密	良好	6.6	1.2	1/3	北調査区部内上部整地土層	
18	小皿	2.5Y6/2灰黄	密	良好	7.8	1.8	1/2	南調査区拡張部整地土層	
19	小皿	10YR7/4にぶい黄橙	やや密	良好	7.6	1.4	3/4	北調査区部内上部整地土層	
20	小皿	10YR8/3浅黄橙	密	良好	7.6	1.3	1/4	南調査区拡張部整地土（I層）	
21	小皿	2.5Y7/6明黄褐	密	良好	7.4	1.6	完形	南調査区拡張部整地土層	
22	小皿	10YR8/4浅黄橙	密	良好	7.7	2.6	1/4	北調査区部内上部整地土層	
23	小皿	10YR8/3浅黄橙	密	良好	8.0	1.8	1/4	北調査区整地土層	
24	小皿	2.5Y7/3浅黄	密	良好	7.8	1.5	1/2	北調査区濠埋土上部	
25	小皿	10YR7/1灰白	密	良好	8.0	1.2	1/4	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
26	小皿	2.5Y8/4淡黄	密	良好	5.0	1.8	1/12	北調査区部内上部整地土層	
27	小皿	10YR8/3浅黄橙	密	良好	8.7	1.6～1.8	1/4	北調査区整地土層	
28	小皿	2.5Y6/2灰黄	密	良好	10.2	1.8	1/2	北調査区濠埋土上部 （灰色砂灰黒粘土）	
29	小皿	2.5Y6/1黄灰	密	良好	11.0	1.9	1/3	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
30	小皿	2.5Y8/3淡黄	密	良好	11.0	2.5	1/3	南調査区拡張部濠埋土肩部	
31	小皿	10YR8/4浅黄橙	密	良好	13.0	2.0	1/6	北調査区部内上部整地土層	
32	小皿	2.5Y7/1灰白	密	良好	13.2	1.8	1/4	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
33	土師質・土釜	10YR8/3浅黄橙	密	良好	21.0	4.95	1/6	南調査区深掘部 濠埋土下半（砂層以下）	
34	土師質・土釜	2.5Y4/1黄灰	密	良好	18.6	4.7	1/6	南調査区拡張部濠埋土肩部	
35	土師質・土釜	2.5Y7/2灰黄	密	良好	21.0	7.25	1/6	南調査区拡張部整地土（I層）	
36	土師質・土釜	10YR8/3浅黄橙	密	良好	22.6	5.8	1/6	南調査区拡張部	
37	土師質・土釜	10YR8/2灰白	密	良好	21.6	4.8	1/8	南調査区深掘部 濠埋土下半（砂層以下）	
38	土師質・土釜	10YR7/4にぶい黄橙	密	良好	21.6	6.7	1/3	南調査区拡張部濠埋土肩部	
39	土師質・土釜	2.5Y8/1灰白	密	良好	23.0	4.7	1/12	廃土中より表採	
40	土師質・土釜	7.5YR4/1褐灰	密	良好	19.2	5.2	1/12	北調査区濠埋土上部 （灰色砂～灰黒粘土）	
41	土師質・土釜	10YR8/6黄橙	密	良好	14.0	6.0	1/6	南調査区拡張部	
42	土師質・土釜	2.5Y2/1黒	密	良好	18.2	5.25	1/12	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
43	土師質・土釜	2.5Y8/2灰白	密	良好	18.0	12.5	1/6	南調査区拡張部整地土（I層）	
44	土師質・土釜	10YR2/1黒	密	良好	19.6	3.2	1/6	南調査区深掘部 濠埋土下半～濠底面直上	
45	土師質・焙烙	7.5YR6/6橙	密	良好	27.8	4.5	1/12	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
46	瓦質・すり鉢	N4/0灰	密	良好	23.2	3.4	1/12	北調査区濠埋土上部	
47	瓦質・すり鉢	N5/0灰	密	良好	27.8	4.6	1/12	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
48	瓦質・すり鉢	N4/0灰	密	良好	18.6	4.7	1/6	北調査区濠埋土上部 （灰色砂～灰黒粘土）	
49	瓦質・すり鉢	7.5Y8/1灰白	密	良好	—	4.4	破片	南調査区深掘部濠埋土下半～底面	
50	瓦質・すり鉢	10Y7/1灰白	密	良好	—	4.8	破片	南調査区拡張部	
51	瓦質・すり鉢	5Y4/1灰	密	良好	—	7.5	破片	南調査区拡張部濠埋土肩部	
52	瓦質・すり鉢	5Y6/1灰	密	良好	—	7.6	破片	南調査区拡張部	
53	瓦質・すり鉢	10YR8/4浅黄橙	密	良好	10.0	6.4	1/3	南調査区拡張部整地土（I層）	
54	瓦質・すり鉢	2.5Y3/1黒褐	密	良好	—	3.7	破片	北調査区濠埋土上部	
55	瓦質・すり鉢	2.5Y7/2灰黄	密	良好	—	3.8	破片	北調査区濠埋土上部	
56	瓦質・すり鉢	2.5Y7/2灰黄	密	良好	—	4.3	破片	南調査区深掘部濠埋土下半～底面	
57	瓦質・角火鉢	N5/0灰	密	良好	—	5.0	破片	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
58	瓦質・火鉢	N5/0灰	密	良好	—	4.2	破片	南調査区拡張部整地土（I層）	
59	瓦質・火鉢	2.5Y3/1黒褐	密	良好	—	5.05	破片	南調査区拡張部濠埋土上肩部	
60	瓦質・雑器	5Y4/1灰	密	良好	—	7.9	破片	濠埋土上面～上半	
61	瓦質・雑器	N4/0灰	密	良好	—	6.4	破片	濠埋土上面～上半	
62	瓦質・雑器	5Y8/1灰白	密	良好	—	6.8	破片	濠埋土上面～上半	
63	瓦質・雑器	5Y7/1灰白	密	良好	—	12.4	破片	南調査区拡張部整地土（I層）	
64	瓦質・雑器	N4/0灰	密	良好	—	5.0	破片	濠埋土下半（砂層以下）	
65	瓦質・雑器	5Y4/1灰	密	良好	—	6.2	破片	濠埋土下半（砂層以下）	
66	瓦質・雑器	2.5Y7/1灰白	密	良好	24.4	4.2	1/12	南調査区拡張部	
67	瓦質・雑器	10Y5/1灰	密	良好	—	3.4	破片	南調査区拡張部	
68	瓦質・雑器	N5/0灰	密	良好	—	14.2	破片	濠埋土上面～上半	
69	瓦質・雑器	N6/0灰	密	良好	—	9.6	破片	濠埋土上面～上半	
70	瓦質・釜	2.5Y7/3浅黄	密	良好	17.0	4.65	1/8	濠埋土下半（砂層以下）	
71	瓦質・釜	2.5Y2/1黒	密	良好	22.0	4.8	1/12	北調査区部内上部整地土層	
72	瓦質・香炉	2.5Y4/1黄灰	密	良好	9.8	5.0	1/5	北調査区濠埋土上部 （灰色砂～灰黒粘土）	
73	瓦質・香炉	N4/0灰	密	良好	11.8	4.2	1/12	南調査区拡張部濠埋土肩部	
74	瓦質・雑器	5YR6/6橙	密	良好	38.0	5.4	1/6	南調査区拡張部整地土（I層）	
75	瓦質・雑器	N4/0灰	密	良好	24.0	3.0	1/12	濠埋土下半～底面	
76	瓦質・雑器	5Y7/1灰白	密	良好	29.2	4.4	1/8	濠埋土下半～濠底面直上	
77	瓦質・雑器	N3/0暗灰	密	良好	—	3.2	破片	南調査区深掘部濠埋土下半～底面	
78	瓦質・土管	10Y5/1灰	密	良好	—	4.1	破片	南調査区深掘部濠埋土下半～底面	
79	瓦質・円盤	N7/0灰白	密	良好				南調査区深掘部濠埋土下半	土器からの転用
80	瓦質・円盤	N3/0暗灰	密	良好				南調査区深掘部濠埋土下半	土器からの転用
81	瓦質・円盤	N4/0灰	密	良好				南調査区深掘部濠埋土下半	土器からの転用

陶磁器

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量 口径(底径)	器高(残存高)	残存率(口縁)	出土地点	備考
82	すり鉢	2.5YR4/1赤灰	密	良好	—	5.7	破片	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	信楽
83	すり鉢	10R3/1暗赤灰	密	良好	—	2.9	破片	南調査区拡張部	信楽
84	天目茶碗	7.5YR2/1黒(釉) 7.5YR4/6褐(胎土)	密	良好	8.8	3.1	1/12	北調査区埋土上部	瀬戸・美濃
85	碗	7.5Y6/2灰オリーブ(釉) 7.5YR5/4にぶい褐	密	良好	4.2	3.1	底部2/3	北調査区濠埋土上部	唐津
86	碗	7.5Y5/2灰オリーブ(釉) 7.5YR4/3褐(胎土)	密	良好	4.1	3.75	底部完形	南調査区深掘部 濠埋土下半(砂層以下)	唐津
87	碗	10BG7/1明青灰	密	良好	5.0	3.7	底部完形	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	肥前
88	碗	10GY8/1明緑灰	密	良好	9.2	7.1	1/12	表土中より表採	肥前
89	碗	10GY8/1明緑灰	密	良好	11.0	4.7	1/6	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	肥前
90	碗	10Y8/1灰白(釉) 7.5YR8/6浅黄橙(胎土)	密	良好	7.2	3.5	2/3	南調査区拡張部整地土(Ⅰ層)	肥前
91	碗	10GY8/1明緑灰	密	良好	12.0	4.8	1/6	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	肥前
92	碗	7.5GY8/1明緑灰	密	良好	11.2	8.5	高台欠く	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	肥前
93	碗	7.5GY8/2明緑灰	密	良好	11.0	4.0	1/8	南調査区拡張部	肥前
94	碗	7.5GY8/3明緑灰	密	良好	11.0	3.7	1/2	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	肥前
95	碗	7.5GY8/4明緑灰	密	良好	12.0	3.7	1/12	南調査区拡張部整地土(Ⅰ層)	肥前
96	碗	2.5GY6/1オリーブ灰(釉) 5P5/1紫灰(胎土)	密	良好	14.4	4.2	1/12	北調査区郭内上部整地土層	輸入青磁
97	青磁碗	7.5GY7/1明緑灰	密	良好	12.8	5.8	1/4	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	輸入？
98	杯	5B7/1明青灰	密	良好	4.4	2.6	底部3/2	南調査区拡張部濠埋土肩部	
99	皿	10GY8/1明緑灰	密	良好	11.2	2.5	1/8	北調査区埋土上部	
100	皿	5Y8/0灰白	密	良好	9.4	2.8	1/12	南調査区深掘部濠埋土下半～底面	
101	皿	5Y7/1灰白	密	良好	7.4	1.8	1/5	南調査区拡張部濠埋土肩部	
102	碗	10Y8/1灰白	密	良好	10.0	4.3	1/6	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
103		5Y7/1灰白	密	良好	—	4.4	破片	南調査区拡張部	国産白磁
104	碗	7.5GY7/1明緑灰(釉) 胎土は白	密	良好	4.8	3.2	1/4	北調査区郭内上部整地土層	国産青磁
105	壺	5Y4/2灰オリーブ	密	良好	15.8	3.7	1/6	南調査区拡張部濠埋土肩部	赤膚焼き
106		7.5Y5/3灰オリーブ	密	良好	17.6	4.0	1/3	南調査区拡張部整地土	赤膚焼き
107	燭台	2.5Y7/2灰黄(胎土)	密	良好	2.4 5.8	1.3	完形	南調査区深掘部濠埋土上面～上半	
108	ガラス瓶				3.2	7.0	完形	南調査区拡張部整地土 上層下部～濠埋土上面	ヤクルト容器

瓦

番号	種類	色調	胎土	焼成	出土地点	備考
109	軒丸瓦	N5/0灰	やや密	良好	北調査区濠埋土上部	瓦当は左巻き三つ巴
110	軒平瓦	2.5Y7/2灰黄	密	良好	南調査区濠埋土下半～床面	瓦当は波状文と輪郭線彫りの半裁菊花文 菊花は6弁、波の線は3本
111	軒平瓦	N5/0灰	密	良好	北調査区整地土層	瓦当が剥離した痕跡が残る 玉縁側、矢印の位置に三本の線状の刻印
112	軒丸瓦	N5/0灰	密	良好	北調査区整地土層	瓦当は残っていないが滑り止めの横線が付いているもの
113	丸瓦	5Y6/2灰オリーブ	密	良好	北調査区整地土層	玉縁外面に○に一の刻印
114	丸瓦	5Y5/1灰	密	良好	北調査区濠埋土上部 灰色砂～灰黒粘土	玉縁外面に○に一の刻印
115	丸瓦	5Y5/1灰	密	良好	北調査区整地土層	玉縁外面に○に一の刻印
116	丸瓦	5Y6/2灰オリーブ	密	良好	北調査区郭内上部整地土層	玉縁外面に○の刻印
117	平瓦	N7/0灰白	密	良好	北調査区郭内上部整地土層	端面に桐の刻印
118	平瓦	N4/0灰	密	良好	北調査区濠埋土上部 (灰色砂～灰黒粘土)	端面に桐の刻印
119	平瓦	10YR6/2灰黄褐	やや密	良好	北調査区郭内上部整地土層	端面に○に一の刻印
120	鬼瓦	N5/0灰	密	良好	北調査区濠埋土上部	珠文部分のみ
121	鳥衾瓦	10YR8/4浅黄橙	やや密	良好	北調査区濠埋土上部	瓦当は左巻き三つ巴
122	面戸瓦	10YR7/2にぶい黄橙	密	良好	南調査区深掘部 濠埋土下半(砂層以下)	凸面に桐の刻印

木製品

番号	種類	最大長	最大幅	出土地点	備考
123	下駄	20.0	10.6	北調査区濠埋土上部(灰色砂層より下位)	
124	下駄	16.1	8.5	北調査区濠埋土上部(灰色砂～灰黒粘土)	加工中か
125	建築材？	22.7	3.5	南調査区拡張部整地土層	

銭

番号	貨幣名称	色調	初鋳年	王朝	長さ(縦)	長さ(横)	出土地点	備考
126	咸平元寶	緑褐	998	北宋	2.3	2.4	北調査区濠埋土上部灰色砂層	
127	政和通寶	淡青緑	1111	北宋	2.2	2.4	南調査区拡張部上部整地土層下部	
128	永楽通寶	緑褐	1408	明	2.5	2.5	北調査区濠埋土最上部明褐色細砂	

混入遺物(土器)

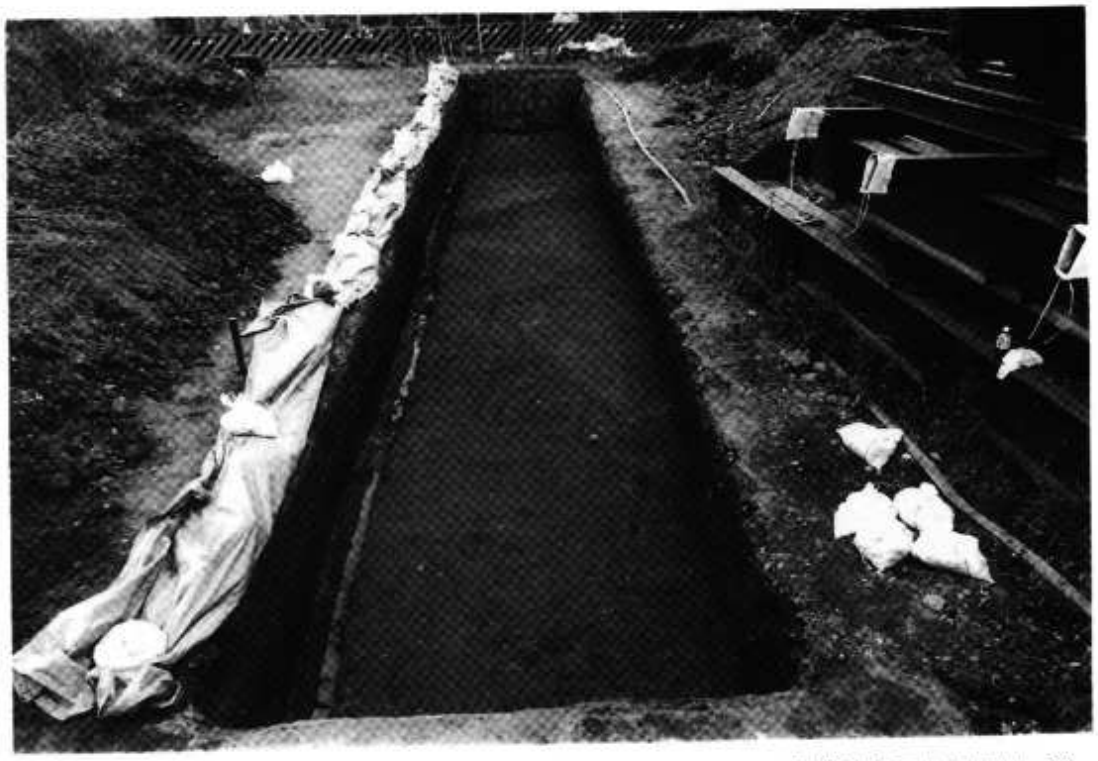
	器種	色調	胎土	焼成	法量 口径(底径)	器高(残存高)	残存率	出土地点	備考
129	甕	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良好	4.0	2.7	底部完形	北調査区濠埋土上部 (灰色砂～灰黒粘土)	弥生土器
130	壺	5YR6/4にぶい橙	密	良好	4.2	1.9	底部完形	南調査区拡張部	弥生土器
131	甕	10YR6/2灰黄褐	粗	良好	6.5	3.1	3/4	北調査区整地土層	弥生土器
132	高杯(脚部)	7.5YR6/6橙	やや粗	良好	—	3.6	破片	北調査区濠埋土上部 (灰色砂～灰黒粘土)	弥生土器
133	壺	5YR6/3にぶい黄橙	密	良好	7.0	3.4	1/6	南調査区拡張部濠埋土肩部	弥生～古墳
134	須恵器	N7/0灰白	密	良好	11.2	2.1	1/8	南調査区拡張部整地土(Ⅰ層)	
135	須恵器・蓋	N6/0灰	密	良好	—	1.8	破片	北調査区濠埋土上部 (灰色砂～灰黒粘土)	
136	須恵器	N5/0灰	密	良好	—	5.8	破片	北調査区濠埋土上部	
137	須恵器	N6/0灰	密	良好	—	3.7	破片	南調査区拡張部	
138	須恵器	N6/0灰	密	良好	—	5.9	破片	南調査区拡張部	
141	土馬	7.5YR6/6橙	粗	良好				北調査区郭内上部整地土層	
142	瓦器椀	10YR4/1褐灰	密	良好	13.7	3.1	1/12	南調査区拡張部整地土(Ⅰ層)	
143	瓦器椀	N4/0灰	密	良好	14.4	3.0	1/6	南調査区拡張部	

混入遺物(瓦)

番号	種類	色調	胎土	焼成	出土地点	備考
139	平瓦	10YR8/4浅黄橙	やや密	良好	北調査区郭内上部整地土層	凸面に縄目のタタキが残る
140	平瓦	10YR7/2にぶい黄橙	やや密	良好	北調査区濠埋土上部	凸面に縄目のタタキが残る

図版1　大和古墳群・成願寺遺跡1

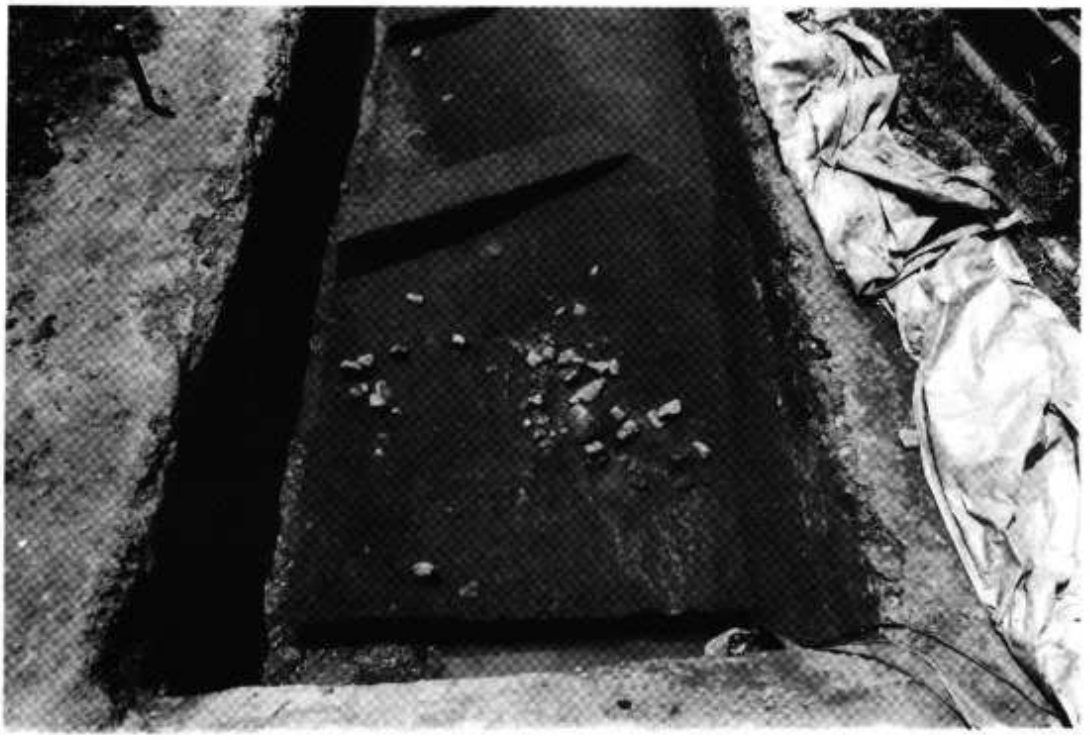
調査前全景（南から）



遺構検出面全景（北から）

図版２　大和古墳群・成願寺遺跡２

古墳周濠ＳＤ０１検出状況（南東から）



古墳周濠ＳＤ０１上層崩壊葺石礫群検出状況（北から）

古墳周濠ＳＤ０１下層崩壊葺石礫群検出状況（北東から）

古墳周濠ＳＤ０１下層遺物出土状況（北東から）

古墳周濠ＳＤ０１下層遺物出土状況（東から）

古墳周濠ＳＤ０１下層遺物出土状況（南から）

古墳周濠ＳＤ０１南アゼ土層断面（北東から）

古墳周濠ＳＤ０１北アゼ土層断面（南から）

土坑ＳＫ０１検出状況（東から）

土坑ＳＫ０１完掘状況（東から）

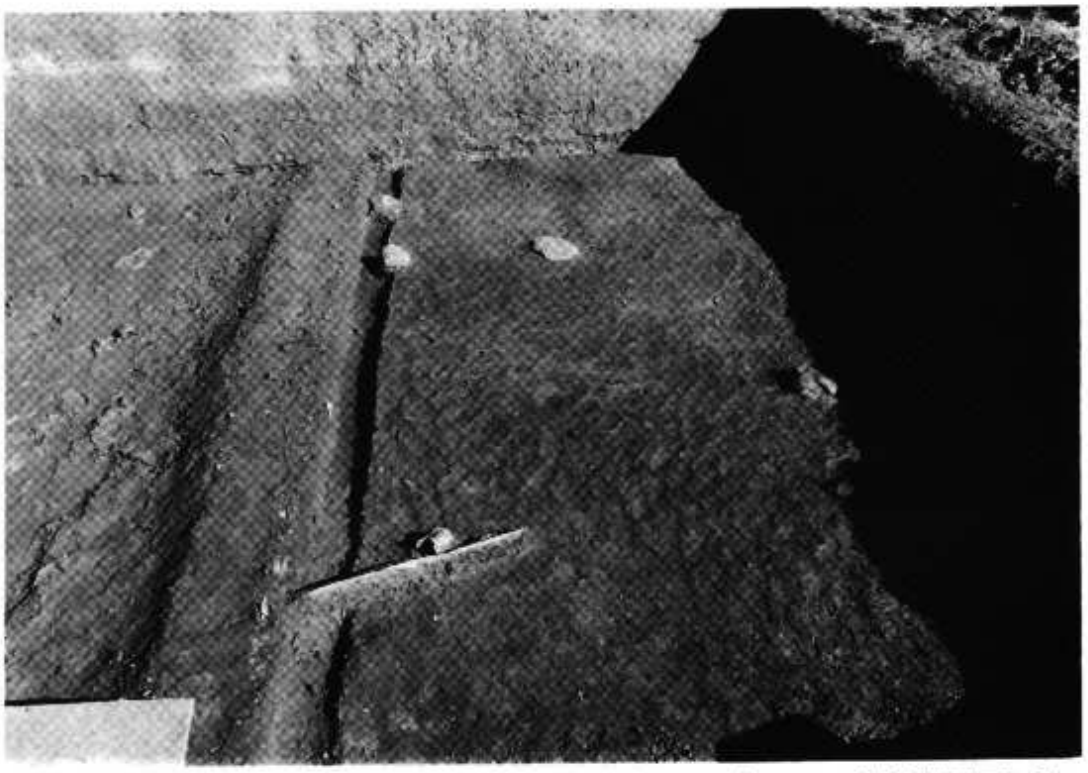
作業風景（北西から）

作業風景（南東から）

調査区全景（北から）

図版９　平等坊・岩室遺跡第22次１

調査前全景（南から）



方形区画溝ＳＤ０１検出状況（西から）

方形区画溝ＳＤ０１遺物出土状況（東から）

方形区画溝ＳＤ０１検出状況（西から）

大溝ＳＤ０１完掘状況（西から）

調査区北（Ⅱ区）全景（南から）

溝ＳＤ０２と連結した土坑（西南から）

調査区北（Ⅱ区）土層断面（北西から）

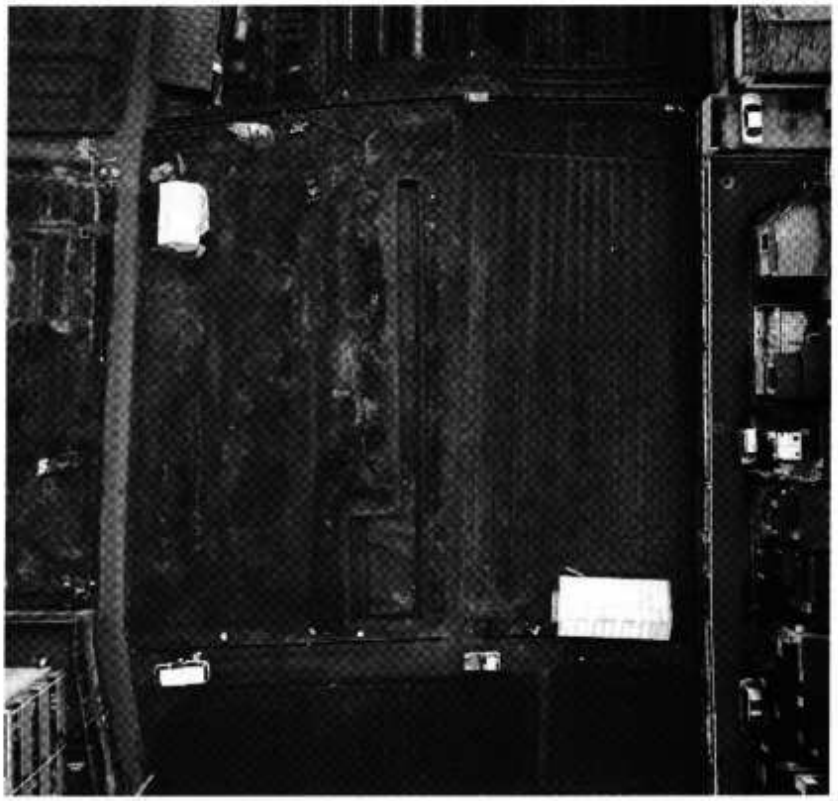
ＮＲ０１土層断面（西南から）

調査区南（Ｉ区）遺構検出状況（南から）

調査区南（Ⅰ区）土層断面(西北から)

調査区南（Ⅰ区）土層断面（北東から）

調査区遠景
（北西から）



調査区上空よりの
垂直写真（上が北）

図版16　柳本立花遺跡第2次1

調査前全景（北から）

調査区土層断面（南東から）

土坑ＳＫ０１完掘状況（西から）

調査区全景（南から）

図版18　柳本立花遺跡第2次3

調査区遠景
（北西から）

調査区上空よりの
垂直写真（左が北）

図版19　柳本立花遺跡第3次1

遺構面検出状況（東から）

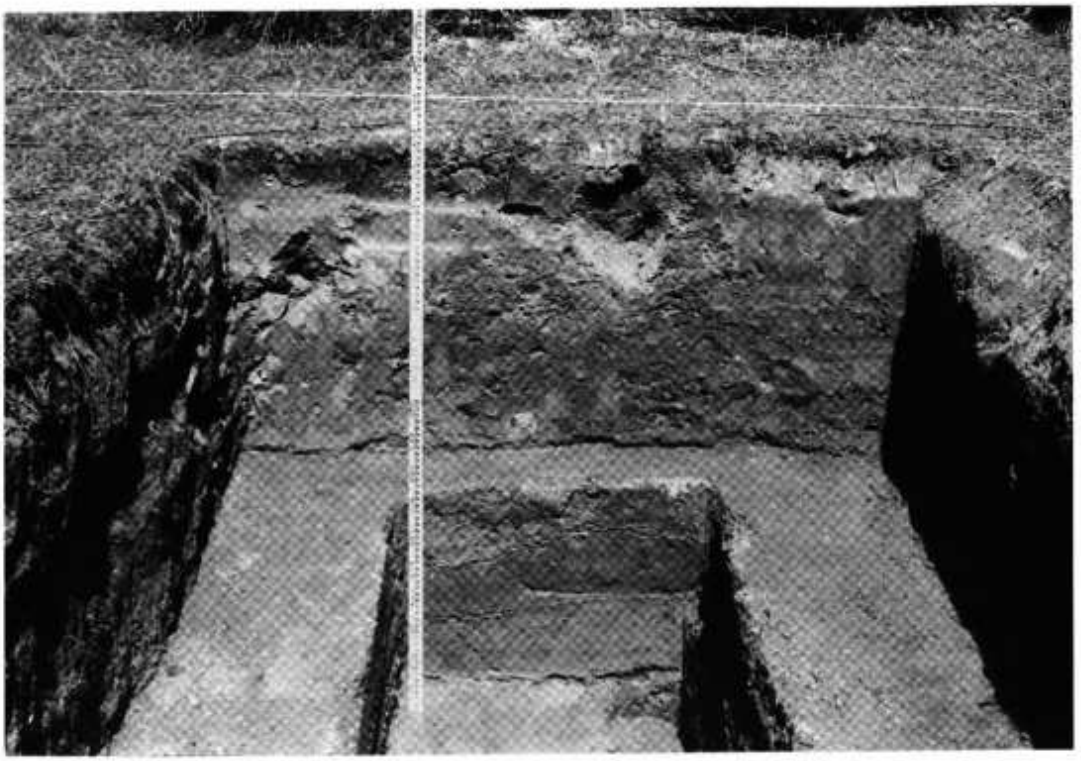
調査区全景（西から）

図版20　柳本立花遺跡第3次2

調査区遠景
（東から）

調査区上空よりの
垂直写真（下が北）

図版21　平等坊松ノ木遺跡第2次

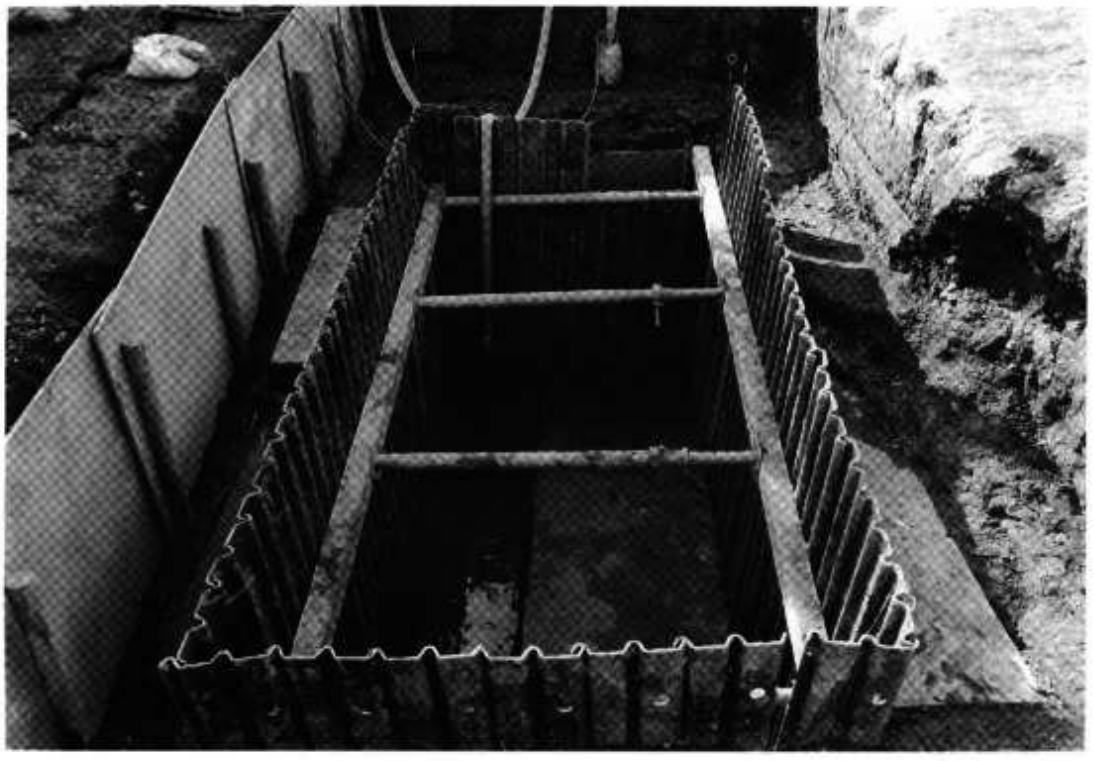


調査区北壁土層（南から）

調査区全景（南から）

図版22　平等坊環濠遺跡1

調査前全景（北西から）



南調査区深掘り部分完掘状況（東から）

南調査区拡張区土層断面（南から）

北調査区土層断面（北から）

図版24　平等坊環濠遺跡3

調査地遠景（上が北）

調査区全景（上が北）

平成17年3月31日©

天理市埋蔵文化財調査概報
（平成14・15年度国庫補助事業）

発　行　天理市教育委員会
編　集　天理市川原城町605番地

印　刷　天　啓
天理市森本町810番地